

桑原遺跡群

— 第1次調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第432集

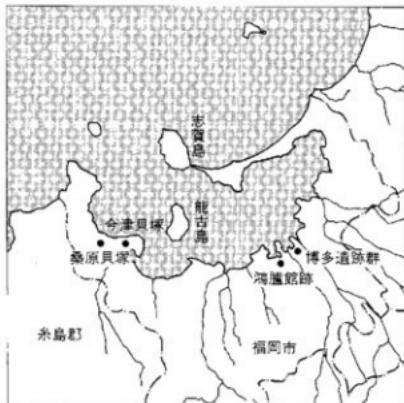
1995

福岡市教育委員会

桑原遺跡群

— 第1次調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第432集



1995

福岡市教育委員会

序 文

博多湾に面した福岡市は鶴翼状に広がった都市ですが、豊かな自然環境と歴史的な遺産に恵まれています。特に西部地域は手つかずの自然景観を残しているところですが、近年における福岡市の著しい市街化によって開発を余儀なくされており、その姿を変貌しつつあります。

特に九州大学の移転事業に関連して、西部地域の開発計画は公共・民間事業を問わず枚挙に違かない程度です。福岡市西部地域の自然環境と歴史的遺産を保護し、後世に伝えてゆくために、日頃その保存に努めることは言うまでもなく、文化財や自然環境との調和のとれた開発が望まれるところです。

福岡市教育委員会では、今後、西部地域における各種の開発事業に伴い、失われゆく埋蔵文化財の保存・保護措置に努めていく所存です。

本書は平成4年度に実施した桑原遺跡群の発掘調査成果について報告するものです。この調査地点は、従来から周知されていた桑原飛櫓貝塚の分布範囲に位置しており、縄文時代貝塚の他、弥生時代から鎌倉時代までの遺構・遺物を見発すことができました。なかでも貝塚の調査は福岡市においては初めての例です。ここでは縄文時代後期の土器や装飾品・獸骨・人骨など豊富な遺物が出土しており当時の生活を知る重要な手掛かりになるものと考えられます。

本書が市民の埋蔵文化財へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾 花 剛

例　　言

1. 本書は西区桑原の道路拡幅工事に伴い、福岡市教育委員会が平成4（1992）年11月2日から平成5（1993）年1月23日の期間中に発掘調査を実施した桑原（くわばる）遺跡群の調査報告である。
2. 発掘調査は文化財部埋蔵文化財課の井澤洋一、吉武学が担当した。
3. 本書には東桑原遺跡第1次調査、及び桑原遺跡第1次調査の古墳～鎌倉時代の遺構・遺物を中心収録する。又、紙面の都合により绳文時代貝塚、及び弥生時代の遺物については次回の報告書に収録する予定である。
4. 本書に掲載した遺構の実測は、井澤洋一、吉武学、西口キミ子、多田映子、福田小菊が行った。
5. 遺物の実測は池田孝弘、牛房綾子、福田小菊、多田映子、井澤が行った。尚、石器、大型遺物については器械実測を行い、吉田扶希子、廣嶋香、田中昭子が担当した。
6. 遺構・遺物の製図は牛房、廣嶋、吉永祐美子が行い、石器の製図は井澤が担当した。
7. 遺構の写真撮影は井澤、吉武が、遺物の撮影は、吉田が行った。
8. 本書に掲載する遺構一覧表は牛房が、遺物一覧表は井澤、吉田扶希子、三浦明子が作成した。
9. 本書作成にあたっては、池田洋子の協力を得た。
10. 遺構番号は発掘調査中に於いて検出した順に番号をふり、本書では遺構略号を遺構番号の頭に付いた。遺構の略号として用いたのはSC（住居跡）、SK（土壙）、SR（土壙墓）、SX（貝塚）、SP（小穴）である。
11. 本書の遺物番号は遺構の種類毎に通し番号で示し、挿図・図版番号に一致させている。
12. 本書に用いた方位は磁北である。
13. 本報告にかかる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
14. 本書の執筆は井澤が担当し、編集は牛房の協力のもと井澤が行った。

（東桑原第1次調査）

遺跡調査番号	9 2 5 4			遺跡略号	KWH-1
地　　番	福岡市西区大字桑原字下ノ谷865-1			分布地図番号	桑原129
開　　発　面　積	40,000m ²	調査対象面積	600m ²	調　査　面　積	15m ²
調　査　期　間	1992年（平成4年）11月2日～1992年（平成4年）11月4日				

（桑原第1次調査）

遺跡調査番号	9 2 4 3			遺跡略号	KWR-1
地　　番	福岡市西区大字桑原字立浦762-1,877-1			分布地図番号	桑原129
開　　発　面　積	40,000m ²	調査対象面積	500m ²	調　査　面　積	300m ²
調　査　期　間	1992年（平成4年）11月5日～1993年（平成5年）1月23日				

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 発掘調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の組織	1
3. 立地と歴史的環境	3
第2章 東桑原遺跡第1次調査	7
1. 立地と環境	9
2. 調査経過	9
3. 調査概要	11
(1) 概要	11
(2) 土層	11
4. 遺構・遺物説明	13
(1) 遺構	13
(2) 出土遺物	13
5. まとめ	13
第3章 桑原遺跡第1次調査	15
1. 調査経過	17
2. 立地と環境	17
3. 第1地点の調査概要	17
(1) 概要	17
(2) 土層	20
(3) 遺構面	24
4. 遺構説明	26
(1) 据立柱建物 (S B)	26
(2) 土壙 (SK)	26
(3) 住居跡 (SC)	33
5. 遺物説明	34
(1) I 区北側谷出土遺物	34
(2) I 区包含層出土遺物	34
(3) II 区第1・2面SP出土遺物	36
(4) II 区第1・2面出土遺物	36
(5) II 区包含層出土遺物	41
(6) III 区第1面出土遺物	43
(7) III 区包含層出土遺物	43
(8) 表土出土遺物	48
6. 第2地点の調査	54
(1) 概要	54
(2) 土層	54
7. まとめ	55

挿 図 目 次

Fig. 1	桑原遺跡群と周辺の遺跡（縮尺 1/2,500）	2
Fig. 2	新西部埋立場関係区域と遺跡分布図（縮尺 1/16,000）	5
Fig. 3	桑原遺跡群と調査区位置図（縮尺 1/2,000）	6
Fig. 4	東桑原遺跡調査地点位置図（縮尺 1/1,000）	9
Fig. 5	調査区土層図（縮尺 1/80）	12
Fig. 6	桑原遺跡調査地点位置図（縮尺 1/800）	18
Fig. 7	道路拡張区域と試掘調査位置図（縮尺 1/1,000）	19
Fig. 8	調査区南側旧河川土層模式図	20
Fig. 9	調査区西側壁面土層図（縮尺 1/80）	22
Fig. 10	調査区第1～3面遺構面の断面模式図	24
Fig. 11	桑原遺跡調査第1～3面遺構配置図（縮尺 1/200）	27
Fig. 12	土壤SK01・02実測図（縮尺 1/40）	28
Fig. 13	土壤SK03～05実測図（縮尺 1/40）	31
Fig. 14	住居跡SC01～03実測図（縮尺 1/40）	32
Fig. 15	住居跡SC04・05実測図（縮尺 1/40）	34
Fig. 16	I 区谷出土遺物実測図（縮尺 1/3）	36
Fig. 17	I 区包含層第1・2面出土遺物実測図（縮尺 1/3）	38
Fig. 18	I 区第1・2面SP出土遺物実測図（縮尺 1/3）	39
Fig. 19	SC01・02出土遺物実測図（縮尺 1/3）	40
Fig. 20	SC04出土遺物実測図（縮尺 1/3）	41
Fig. 21	SC05出土遺物実測図（縮尺 1/4）	42
Fig. 22	SC05・SK05出土遺物実測図（縮尺 1/3）	43
Fig. 23	II区SK05・SP出土遺物実測図（縮尺 1/3）	44
Fig. 24	II区包含層出土遺物実測図①（縮尺 1/3）	44
Fig. 25	II区包含層出土遺物実測図②（縮尺 1/3）	46
Fig. 26	II区包含層出土遺物実測図③（縮尺 1/3）	47
Fig. 27	II区包含層出土遺物実測図④（縮尺 1/3・1/2）	48
Fig. 28	III区SK01・SP出土遺物実測図（縮尺 1/3）	51
Fig. 29	III区第1・2面下包含層、表土出土遺物実測図（縮尺 1/3・1/1）	53
Fig. 30	第2地点土層実測図（縮尺 1/60）	54

表 目 次

Tab. 1	桑原遺跡遺構一覧表	57
Tab. 2	桑原遺跡住居跡一覧表	57
Tab. 3	桑原遺跡出土遺物一覧表	58
Tab. 4	桑原遺跡出土金属製品一覧表	66
Tab. 5	桑原遺跡出土石製品一覧表	66

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至る経緯

福岡市西区今津に所在するゴミ埋立処分場は平成7年頃に限界に達するため、新たに埋立処分場の用地が求められることになり、西区大原の柑子岳の北側山麓に約65,000m²を確保して、新西部埋立場の工事が進められることになった。又、同時にゴミ搬入道路の確保も重要な課題となり、元岡から桑原を経由して大原に至る地域において既設道路の拡幅及び新設道路の計画がたてられ、平成3年度から工事着手の予定であった。埋蔵文化財課では、平成2年度から工事主体の環境局施設課と協議を継続して行い、平成3年より新西部埋立場の建設予定地の試掘調査を開始した。I期工事区域は柑子岳の東麓部における場内整備と周回道路の建設が予定されていた。試掘調査の結果、柱穴等を発見したので全面調査とした。平成3年から新西部埋立場内の発掘調査を行い、平成4年度には大原地区の大原A遺跡の範囲を通過する搬入道路、及び桑原遺跡の存在する地区的道路拡幅工事に伴う発掘調査を実施している。

今回の調査対象地は元岡から桑原の間までの搬入道路建設工事区间で、既設道路の拡幅工事である。用地買収の関係から試掘調査が平成4年度にズレ込んだため、全体の工期の関係から試掘調査で遺跡を発見した場合は平成4年度中に発掘調査を対応しなければならない状況となった。

2. 発掘調査の組織

調査委託 福岡市環境局施設部施設課

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾学

試掘調査 主任文化財主事 井澤洋一、文化財主事 吉武学

発掘調査 井澤洋一、吉武学

庶務 吉田麻由美（前任）、西田結花

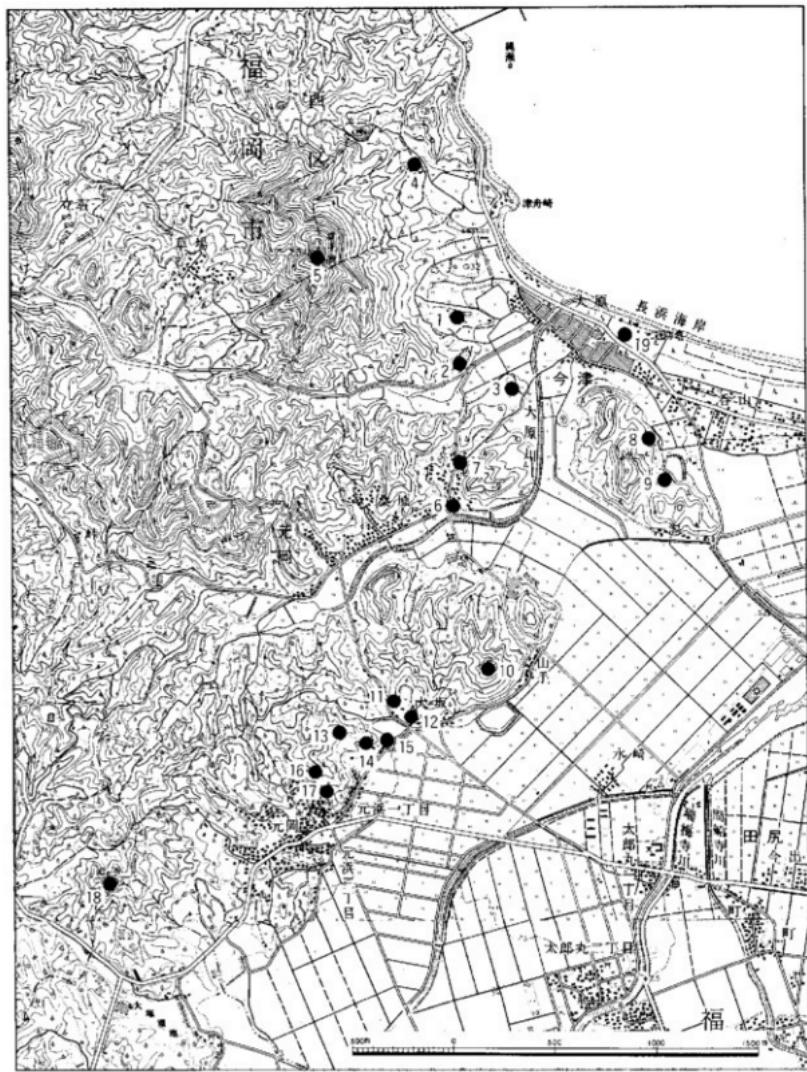
調査協力者 橋良平、吉川春美、横尾泰広、橋知子、谷吉美、西口キミ子、坂本ハツ子、堀タケ子、多田映子、福田小菊、大神ハルヨ、柿木初子、重松トシコ、中村敦子、岡部和重、浜地優子

整理報告 福岡市博物館学芸課主査 井澤洋一（前職 埋蔵文化財課）

調査員 牛房綾子、吉田扶希子、廣嶋香、池田孝弘

整理補助員 西口キミ子、福田小菊、多田映子、堀タケ子、永井鈴子、谷吉美、箱田香代子、黒瀬寿佐子、与那嶺照美、中村麻理子、稻富良子、三浦明子、小松原澄江、田中昭子

以上の他、地元において作業員の募集に関しては元岡公民館主事の中村勝利氏にご尽力をいただき、調査に際しては桑原町内会長の中村安太氏（前）、中村祐雄氏、東桑原町内会長の中村純一氏にご協力をいただいた。排土置場の用地は地権者の中村勝利氏、大神幸男氏にお願いした。更に環境局施設課の小山田謙二、竜隆博、吉田信康の各氏を煩わせたことに末筆ながら謝意を表するものである。



- | | | | | |
|----------|-----------|-----------------|-------------|-------------|
| 1. 大原A遺跡 | 5. 桜子丘城跡 | 9. 谷山遺跡 | 13. 遠ノ浦古墳 | 17. 元岡古墳群D群 |
| 2. 大原B遺跡 | 6. 桑原飛鳥貝塚 | 10. 水崎城跡 | 14. 元岡古墳群B群 | 18. 志摩城跡 |
| 3. 大原C遺跡 | 7. 東桑原遺跡 | 11. 桑原(桑原遺跡)古墳群 | 15. 元岡瓜尾貝塚 | 19. 元岡防壁 |
| 4. 大原D遺跡 | 8. 谷山古墳群 | 12. 元岡古墳群A群 | 16. 元岡古墳群C群 | |

Fig. 1 桑原遺跡群と周辺の遺跡 (縮尺 1/2,500)

3. 立地と歴史的環境

福岡市は明治22（1889）年の市町村制の施行により、人口5万人、面積約5km²でスタートしたが、その後、周辺町村を合併し1市30町村で形成され、現在その面積は336.81km²に至っている。桑原地区は旧志摩郡元岡村に属しており、元岡村は昭和36年に福岡市に合併した。

福岡市最西端の西ノ浦岬は、博多湾の境でもあり、ここから西は玄界灘に面する。この地域は糸島水道を境にして、福岡市西部の早良平野・今宿平野とは地形の様相を異にする。かつては入江が複雑に入り込み、又、独立した島嶼群を思わせるものがある。今津湾は、今では江戸時代の寛文5年（1665）に始まった今津渦の干拓により狭められているが、古くは大原川河口から直接今津湾にでることができたと思われる。志摩郡の名称は、「日本書紀」に「島郡」がはじめてあらわれる。後に「續日本紀」では「志摩」と呼ばれ、郡内に「韓良」「久米」「登志」「明敷」「鶴水」「川辺」「志摩」の7郷があったといわれる。当該地は登志郷内にあたる。

桑原地区は糸島水道の北側にあって、今津湾の西奥に位置し、北東方向の海岸部には大原の砂丘が存在する。山稜が海に迫り、小さな開析谷が複雑に形成され、この開析谷に水田が営まれる。北に桔子岳（254m）、東に今津の尾根門山（140m）、西に石ヶ岳（99.2m）の三方をへだてられるが、南に糸島水道が開け、交通の要衝にあたる立地条件にある。元岡・馬場・初を経由すれば引津湾へ届き、糸島水道を西に加布里湾へ至り、更に、北へ草場を経由すれば東林寺が所在する唐泊に至る。

遺跡は今津湾を中心として多く存在しており、弥生時代の今津・長浜貝塚や、右岸製作地の今山遺跡や呑谷山遺跡等が存在する。この時代は周辺の引津湾岸や加布里湾岸において支石墓も多く発見されていることから、古くからの對外交易を中心とした生業を営んでいたことが伺える。古墳時代は志摩郡に相当し、古代には、大宝2年（702）の川辺郷の戸籍中に志摩郡大領の肥君猪手がいたことが記されている。この肥君猪手は大宰府觀世音寺の製塩を負っていたと云われる。平安時代末にはこの地域に怡土庄がおかれて、この時に皇室領の桑原庄もおかれたと云われる。又、仁平元年（1151）の博多・箱崎の大追捕により、一時衰えた博多貿易を今津湾を中心として負い、このため今津組過など中世遺跡や寺社も多く存在する。臨済禪と茶を伝えた禅僧栄西は誓願寺の創建に関わり、今津において宗教活動を行った。栄西がこの次第を記した「孟蘭盆一品経縁起」は有名である。今津湾は古代・中世における中国・朝鮮交流との重要な拠点でもあり、軍事的拠点でもあった。鎌倉時代の文永の役は博多、筑前に多大な被害を及ぼしたが、元の襲来に備え幕府は日向国・大隅国に命じて、今津海岸・大原海岸に石築地を構築させている。南北朝から戦国時代を通じてこの地域も戦乱とは無縁ではなく、少弐、大友、大内氏といった守護大名の支配が目まぐるしく変わる中で、名主・国人層は対応を迫られた。筑前国守護少弐氏の衰退と共に、怡土莊を実質的に支配していた豊後國の大友氏は筑前支配を強め、豊前国守護であった大内氏と博多貿易の利権や筑前国への支配に関して対立した。大友氏は桔子岳城を筑前西部の戦略拠点とし、その支城として桑原に水崎山城を、元岡に志摩城を置いて、大内氏側の怡土の高祖城と対向した。天文2年（1532）に大内義隆は桔子岳城を落とし、一時期城番をおいているが、その後は和睦によって、大友氏一族の臼杵親連が入城し、大友氏が耳川の戦いで敗れ衰退するまでこの地域は大友氏と志摩7党による支配が行われている。

環境局の工事区域における遺跡は昭和57年発行の「福岡市文化財分布地図西部II」によれば、北から大原古墳群A・大原古墳群B・大原A遺跡・大原B遺跡・大原C遺跡・桑原飛鶴貝塚が所在する。大原A遺跡は平成4年度に圃場整備事業に伴い発掘調査を実施し、弥生時代の住居跡、古代の製鉄遺構、掘立柱建物、中世の掘立柱建物等を発見した。大原B遺跡は昭和51年に病院建設に伴って緊急発

筑前國續風土記 卷之二十三

志摩郡

續日本記 元明天皇和銅二年、築前國島ノ郡の少領に姓を給はしり事あり。是批郡の事國史に見えし始也。

又叢書集十五卷にも、筑前國志摩郡の隣治とかけり。

三代寛禄巻二、貞觀元年正月、太宰府司、筑前國志摩郡兵庫鼓自鳴云云。此郡を志摩と名付し事、昔は今津

のまへ、夷魔山の後の入海西へ通り、桑原元岡の前より前原にいたり、此間告海にして西北の諸村諸山、海

中にありし故、志摩とは名づけらし。志摩とは鳥の字をわかつて字にかける也。百年以前、入海やうやく

田と成て、島に在し西北の諸村、今は皆陸地にづらなり。近年迄東西のはしは、猶残りしか、是又近年

すでに新田となれり。昔の入海よりむかひに、沿村あり。是むかしの海の入江にて、船の泊りし所にして、

唐船をも、こゝにつなげりと云。田の字にも浦の字の付たる名多し。又南に浦志村有。是又海邊にありし故に名付しならん。此入海なりし所の田のそこをかへせ

は、今もかきはまくりのから多し。陵谷變遷の理、古

今其ためしすくならかず。むかしの入海なりし筋よ

りこなたにも、又志摩郡の内青木、女鳳、谷村、今宿、

田尻、太郎丸、板持、高田、志登、淮田、波多江、潤、浦志、前原等諸村あり。すべて中通と云。怡士郡と島

郡入海の中間にあり。通路の左右にある所の村なれば、

名付しならん。此諸村は皆むかしの入海より東南にありて、怡士郡の方につらなり、島の方にはつゝかざれども、入海のほとりに近ければ、志摩郡に属しけるにや。又諸村むかしは怡士郡なりしを、後に亂世の時、

みたりに領地をわかつて、志摩に属しけるにや。されば延喜式神名帳に、志登神社を怡士郡と書しも、

志登村はむかしの入海より南にあれば、いにしへは怡士郡に屬せしを、近代志摩郡に入れしにや。いふかし。

凡て志摩は、其地相ならひ隣りて、國の西裔にあれは、同しくつらねて怡士志摩と稱す。然れども怡士郡は山川そなはり、薪材多く、平原廣くして、良田多し。此郡は西北南三方に海をうける故、所々に漁家ありて、鮮魚多く、海味ともしからず。運送の便よといへとも、山に林木なくして、柴薪材木ともし。山間及海濱に村里多くして、平原すくなく、地やせて良田すくなし。只參豆によろし。海濱にある諸村は、大風の災あれば、秋穀のみのらす。川小にして水災はなし。怡士郡に比し難きのみに非す。國中の諸郡にたくらぶるに、最下郡とすへし。

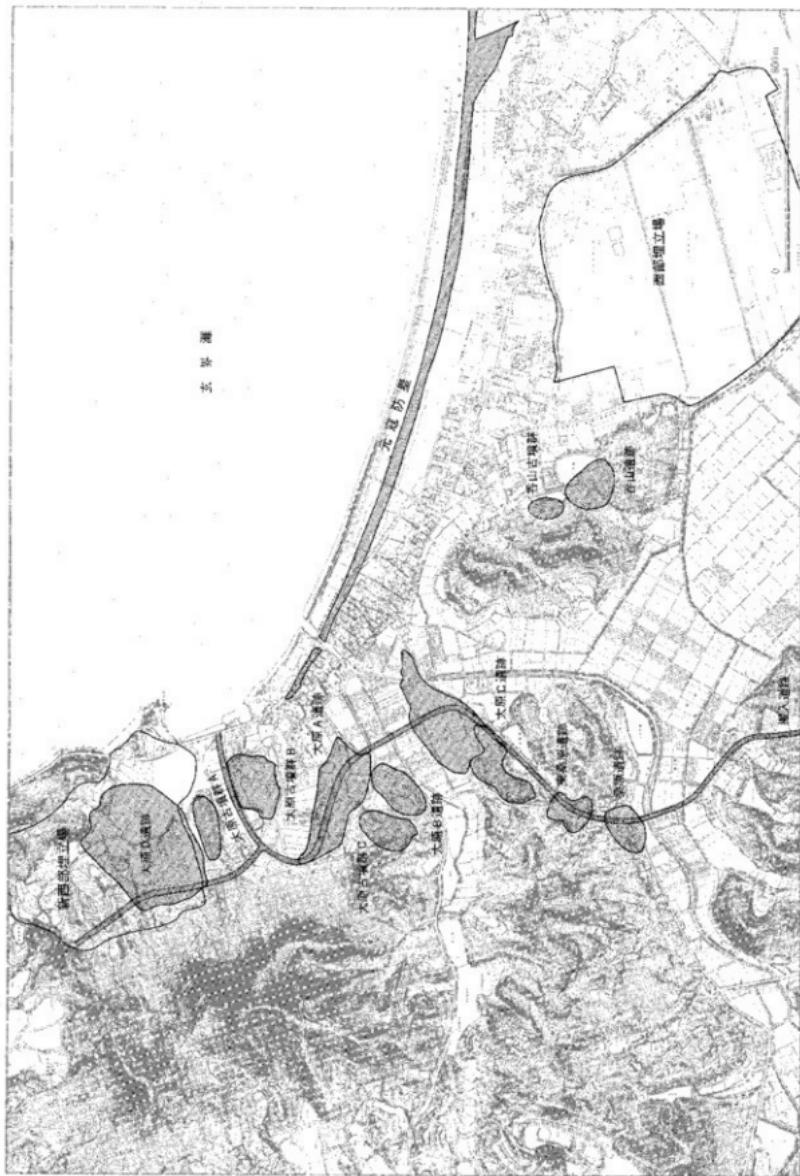


Fig. 2 新西部坝立墙区域之沉积分布图 (缩尺 1/16,000)



Fig. 3 桑原遺跡群と調査区位置図 (縮尺 1/2,000)

第2章 東桑原遺跡

第1次調査



東桑原遺跡全景（南から）

1. 立地と環境

今津湾の西側に位置し、今津渦の干拓以前は桑原地区まで入江であったと考えられる。標高90m前後を最高所とする元岡丘陵群は、開析された幾つもの狭小な谷が入り組んだ複雑地形を呈している。当該地は桑原から桜井へ抜ける県道沿いで、東桑原地区の開析された谷合の深部に位置する。この谷は南側に開口し、東西の長さ約360mを測る。この谷の開口部には縄文時代の桑原飛櫛貝塚が存在している。遺跡の所在する地点は谷の左岸部分に位置し、標高が約56mを測る小高い山の急峻な西斜面の裾部にあたる。この場所の標高は25mを測り、更にヒダ状に小さな谷が開析している。

2. 調査経過

西区大原地区における新西部埋立場の建設工事の着手に伴い、大原から桑原を経由して元岡へ抜ける搬入道路の整備も急がれることになり、桑原地区においては既設の道路の拡幅と新設道路の計画が立てられた。平成4年度には桑原地区における既設道路の拡幅工事が予定され、試掘調査によって遺跡の存在しない地域から順次に工事が着工される予定であった。

埋蔵文化財課では平成3年度から桑原飛櫛貝塚の範囲内を通過する道路拡幅工事区域の試掘調査を実施しており平成4年度には、この桑原貝塚の分布地域において、弥生時代の遺構を検出した。このため平成4年11月から桑原遺跡の発掘調査を実施する予定であった。しかし、発掘調査を開始するに

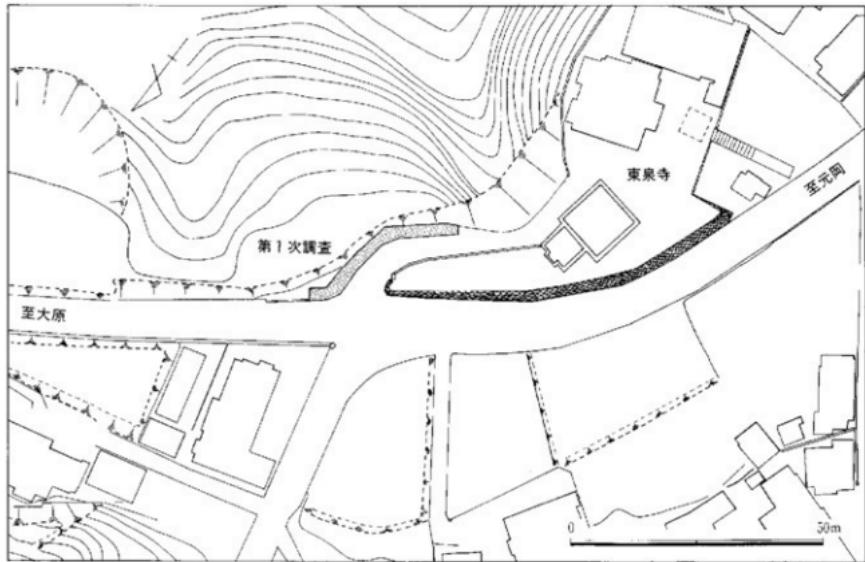
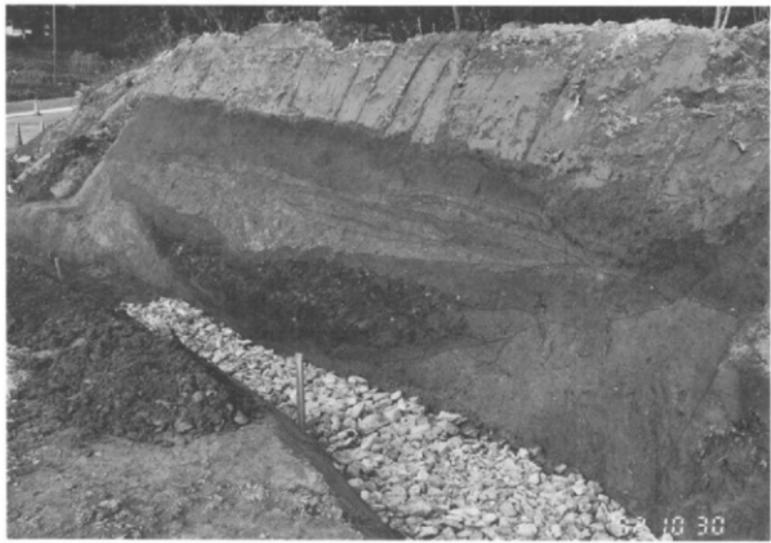


Fig. 4 東桑原遺跡調査地点位置図（縮尺1/1,000）



東桑原遺跡遠景（南西から）



製鉄関連遺構の状態（南から）

当って当該地の立会を行ったところ、東桑原地区において環境局との間における協議事項にない造成が進められていることを知り、この造成地において製鉄遺構を発見するに至った。工事内容は東泉寺の敷地の一部が道路拡幅工事で削られることに伴い、新たに境内の山林一部を造成し、車の進入路と駐車場を確保する目的で行われていた。環境局事業であるため工事中止の要請を行うと共に、桑原遺跡の調査に先行して発掘調査を実施した。

発掘調査は平成4年11月2日～4日の期間中に実施した。既に粗造成は終了しており、擁壁の構築を残すだけとなっていたため、写真・実測等の記録、及び遺物の採集を行う程度にとどまった。

3. 調査概要

(1) 概要

西区大原の柑子岳城の東側山麓においては、大規模なゴミ埋立処分場である新西部埋立場の建設が行われており、この埋立場の搬入路として桑原地区の既設道路の拡幅工事が行われている。

当該地は丘陵斜面の標高14mを測る斜面に立地し、幅15m、深さ約3m程度の浅い開析谷がある。寺への進入路の付け替えと駐車場設置工事のため山は既に南北の長さ30m、幅20mに亘って削られており、崖面に遺構が露出している状況であった。既に削平工事は終了していたので、遺構の規模を確認するため断面の清掃を行い、写真撮影、及び土層図作成を実施した。尚、谷東側の奥部は畑作地になってしまっており、作物の関係から調査はできなかった。崖面の高さ約4.06mを測る。

開析谷から東に小さく分岐した幅20m程度の深い谷に製鉄遺構を検出したが、壁体と鉄滓を多量に含んでおり、残滓物を投棄した場所と考えられる。

(2) 土層

当該地の土層の堆積状況は、第①層が盛土で、畑作のための整地が行われている。この厚さは1.3m～2mをはかる。第②層は旧耕作土である。第③層は灰黄色粘質土で、上面は水平面をなすが、下面是凸凹しており土に縦りが無い。この第③層も客土と考えられる。

第④～⑥層は第③層の下位に位置し、厚さ5～10cm程度の薄い層である。水平堆積している。第⑦層は黄灰色土のブロックと褐色土や頁岩粒子及び黒色土ブロックが混合する層である。第⑧層は褐色土と黒色土の混合土で、粘性が強い。第⑦・⑧層は土層断面でみると堆積状態が扁平なV字形を呈している。堆積土の内容からこれらの層も谷を人為的に埋めた層と考えられる。遺物の出土はない。

第⑩層は第⑪～⑫層の鉄滓、壁体片等の残滓物を含んだ層を覆っている。灰黒色を呈し、鉄滓、土器の細片を含んでおり、残滓物捨て場の上位に自然堆積した層と考えられる。

第⑪～⑬層は、鉄滓・焼土・木炭を含んでおり、その量的比率は各々の土層によって違うが、概ね鉄滓量は夥しい。これらの層中からは土師器片、瓦器片が出土した。第⑯・⑰・⑭～⑯層は地山の上に堆積した層である。第⑯・⑰・⑭・⑯は灰黒色を呈しているので、旧表土と考えられる。第⑭層の黄灰色粘質土は基盤層で、一部には第⑮層のように灰青色に汚染される層が存在する。これらの層からも遺物は出土しない。

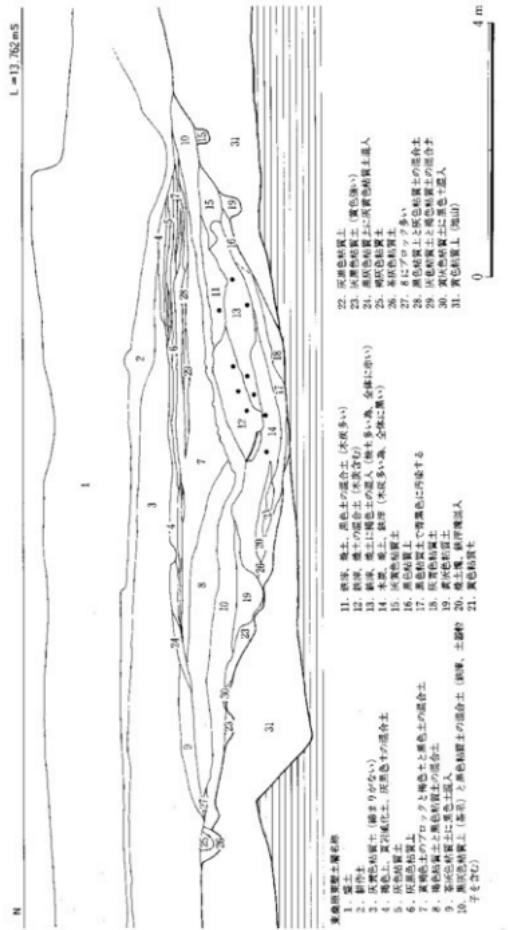


Fig. 5 調査区土層図 (縮尺 1/80)

4. 遺構・遺物説明

(1) 遺構

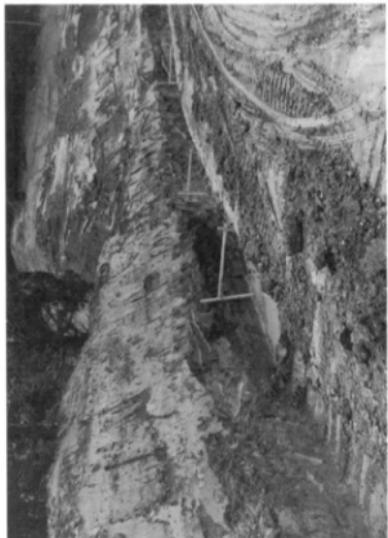
S X 01 製鉄関係廃棄遺構 (Fig. 5) 遺構は最大幅約60m、深さ40mを測る狭小な谷の開口部に存在する。製鉄遺構としての炉跡等の明確な遺構は無く、幅15m、深さ3mを測る谷に鉄滓や炉壁・木炭・焼土等がレンズ状に堆積しているもので、残滓物を投棄した捨て場と考えられる。捨て場の遺構は逆梯形の溝状を呈しており、現状での幅は11.6m、深さ2.5mを測る。木炭・焼土・鉄滓を多量に含んでいたため、黒褐色を呈する。

(2) 出土遺物

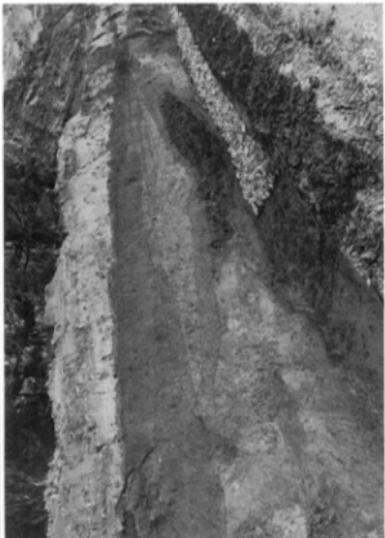
鉄滓は多量であるため、一部をサンプルとしてコンテナ1箱分採集した。採集場所はFig. 5の上層図にドットで記している。炉壁片も多く、土器片、輪の羽口、炭化物が出土した。土器片は土器の他に瓦器碗の破片があるが、いずれも細片のため実測は不可能である。瓦器碗の高台は断面三角形を呈し、厚みを持つことから12~13世紀の時期を比定できる。

5. まとめ

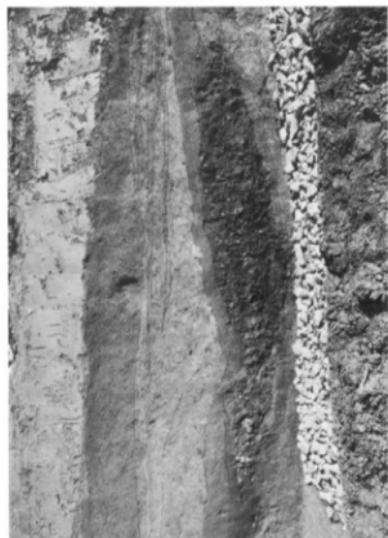
大原の新西部埋立場建設予定地（大原D遺跡）、及び搬入路（大原A遺跡）の発掘調査では奈良～平安時代の製鉄遺構を発見しており、海岸に面した丘陵地帯の谷あいにおいて盛んに鉄生産が行われたことを示している。大原A遺跡では、8~9世紀の箱型の製鉄炉3、鍛冶炉1、掘立柱建物、大原D遺跡の第1次調査では10世紀代の精錬炉と掘立柱建物が検出されている。今回の調査では、更に12~13世紀まで製鉄が行われていたことが判明したが、この地域における鉄生産が、入り組んだ谷あいを利用して盛んに行われることを示している。鎌倉時代において武藤資頼が筑前国守護となつたが、元寇の役の功によって志摩郡東部300町は豊前国の大友氏が総地頭職になつたと云われる。古代から中世にかけては、国衛領内の耕地の開発や荘園の成立、そして、新たな開発領主の出現によって、農耕具の鉄生産が急務であったと思われる。砂鉄が充分に供給でき、且つ、燃料となる木炭の生産が可能な丘陵地帯を後背地に控えたこの地域が最適地として選ばれたものと考えられる。その後の鎮西探題の滅亡、南北朝時代の多々良川合戦などや、朝鮮半島・中国との交易などにこの地域の御家人、名主層は大きな関わりを持っており、この地域が軍事・経済的に重要な位置を占めていたことが伺える。戦国時代には大友氏は辻子岳城を筑前西部の戦略拠点として支城の水崎山城や志摩城を展開させ、大内氏の拠点的な城であった高祖城と対立して仰く状況の中で、守護大名の変更の毎に、離合集散、融合背反を繰り返さなければならない地方豪族・国人層の位置を考慮すれば、鉄生産は重要な産業であり、且つ、武器調達のためにも必要不可欠であったことが想像される。今後予定されている九州大学移転予定地の発掘調査などによって、奈良～戦国時代までの鉄生産遺跡が多数発見され、その構造・規模が明らかにされることが期待されよう。



東桑原遺跡前面の大岩 (左面ふじ)



右側斜面部 (右面ふじ)



東側の状態 (右面ふじ)



左側斜面 (左面ふじ)

第3章 桑原遺跡

第1次調査

— 弥生時代から鎌倉時代の調査 —



桑原遺跡 1次調査遠景（南から）



1. 調査経過

福岡市環境局は福岡市西区大原において新西部埋立場の建設に着手しているが、この工事に伴い工事用道路や搬入道路の整備を余儀なくされており、計画では平成4年度から桑原地区の既設道路の拡幅工事に着手する予定であった。しかしながら、用地買収等の関係から平成4年度に工事がズレ込んだため試掘調査によって遺跡が発見された場合は、当該年度中に調査を行わなければならない状況にあった。当該地は桑原飛櫛貝塚の分布範囲内にある。

試掘調査は平成3年10月29日に実施した。道路拡幅の工事幅は4m～10mを測り、現況の地目は水田である。現道との比高差は2.5mを測るため、重機を使用するには残土処理の問題があった。又、水田内に電柱等の障害物が存在したため、試掘調査が充分に出来ず、Fig.7のような試掘トレンチの配置となった。試掘調査の結果、工事予定地の北側と南側には開析谷が存在しており、谷内の土壤はヘドロ堆積であった。第2トレンチでは耕作土の下より黒褐色粘質土の包含層を検出したため調査対象として保存協議を進める事となった。平成4年度の搬入道路工事は、遺跡が存在しない地域において既に橋梁の架け替工事や拡幅工事が着工されていた。発掘調査の期間は当初、貝塚の存在を確認できていなかっただため2週間程度とみていたので、事前審査の2名で発掘調査の対応を行うこととなった。

発掘調査は平成4年11月5日～平成5年1月23日まで実施した。

2. 立地と環境

遺跡の立地する台地は今津瀬の西側に位置しており、今津瀬の干拓が江戸時代に施工される以前は、入江が迫っていたと考えられる。南北に開析した谷は長さ約400m、開口部の広さ約100mを測る。当該地はこの開口部の右岸にあって、標高約80mの山塊から東南方向へ延びた丘陵の舌状部分に位置する。舌状台地の南側は大原川による削平を受け低位段丘を形成している。南側の段丘面は現地表の水田面から約2mの深さに検出することができる。地山は頁岩で、上部に1～2mの堆積層が存在する。当該地の水田の標高は約6mを測る。又、台地北側は開析谷の浸食を受けて段落ちとなり、ヘドロ堆積が著しい。周辺では谷の北側奥に東桑原遺跡の製鉄遺跡が存在し、大原川を隔てた東側の水崎山には水崎城がある。

福岡市内の縄文時代貝塚は元岡瓜尾貝塚と桑原飛櫛貝塚の2ヶ所が確認されているが、いずれも現在まで発掘調査が行われておらず、遺跡の範囲も定かではない。飛櫛貝塚については昭和47年に防火用水槽の建設工事中に発見された。人骨・獣骨・貝輪・土器等の遺物が採集されており、縄文時代後期に比定されている。元岡瓜尾貝塚は低い海岸段丘上に形成されており、永尾溜池(大阪の池)を築いた際に池畔に貝層があらわれたと云われる。昭和43年2月3日に県史跡に指定された。この貝塚からは土器・石器・骨角器・人骨・シカ・イノシシなどの獣骨等が出土しており、土器から縄文時代後期に比定されている。元岡瓜尾貝塚は九州大学移転用地に含まれているところから、今後、規模や時期の確認調査が行われるものと期待される。

3. 第1地点の調査概要

(1) 概要

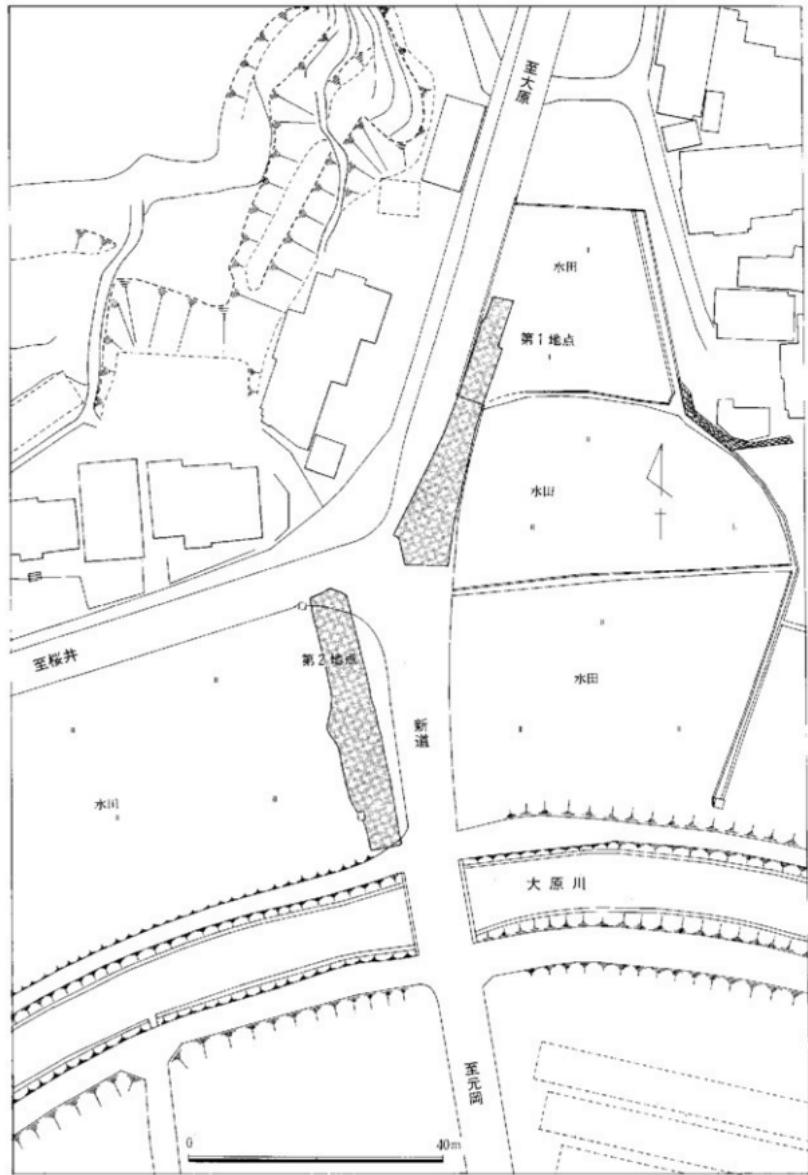


Fig. 6 桑原遺跡調査地点位置図 (縮尺 1/800)

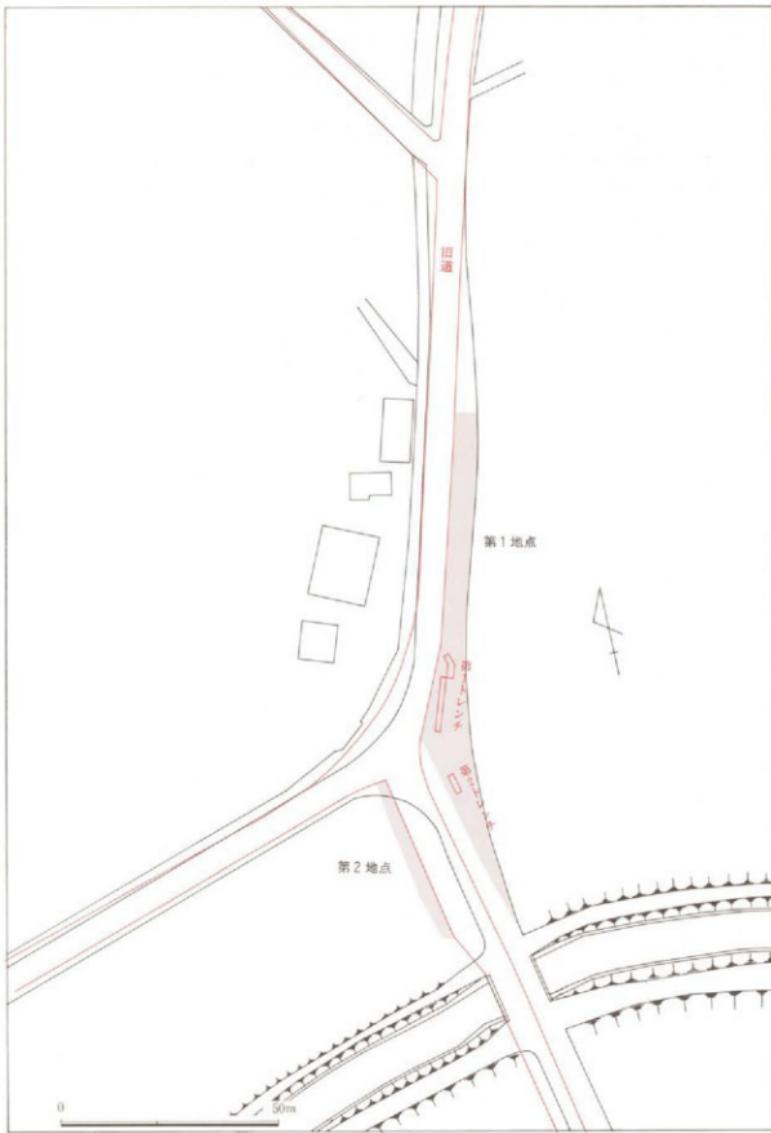


Fig. 7 道路拡張区域と試掘調査位置図 (縮尺 1/1,000)

調査対象範囲は当初は現道東側の道路拡幅部分であったが、発掘調査に着手したところ現道西側も協議事項にない暗渠工事を実施されており、一部貝層が露出していた。このためこの場所を第2地点として急速調査を実施したが、掘削は既に終了しており、発掘調査は写真撮影と実測図の作成にとどまった。

第1地点は長さ100m、幅は4~10mを測る道路拡幅部分である。現状は水田で、3枚に跨っている。発掘調査に先立って試掘調査を行ったが、途中に電柱等が存在し、これらの障害物のために全域に及ぼすことができず、わずか2ヶ所にトレンチを設定した。その結果、T1では耕作土の下にヘドロ堆積がみられ遺構は存在しなかった。又、T2では、南側はヘドロ堆積であったが、北側では住居跡状の遺物包含層を検出した。試掘調査の時点では中世遺構及び、貝塚を確認できなかったため発掘調査は弥生時代の遺構を対象として考えていた。

遺構面の台地は北側の南北方向の開析谷と、東西方向に貫流する大原川の開析により、鋸歯状に東に突き出し、側縁部は段丘を形成している。弥生~古墳時代、或いは中世の集落形成時には貝塚や地山を削平し、且つ客土を行っている。遺構面は鎌倉時代、弥生~古墳時代、縄文時代の3面が存在する。

貝塚はI区の中世整地層の下に検出した。南北の長さ18.8m、東西4m、深さ0.9mを測る。貝塚は上面を中世の整地のため削平を受けており、又、南側は弥生~古墳時代に深さ60cm程切下げられている。貝層の堆積状況は中央部がほぼ水平堆積であるが、北側の縁辺部分の堆積層の傾斜は強い。又、貝層内には表土層と考えられる薄い土混じりの貝殻破碎層が存在している。

発掘調査では調査対象地の中間部に電柱が存在したため、電柱から北側をI区、南側をII区、電柱が存在していた区画をIII区に設定した。II区では表土除去作業の結果、試掘調査で検出した住居跡状の遺構が包含層の一部であることが判明した。遺構面の検出は困難を極め、土層を徐々に下げながら遺構面の検出に努めた。遺物が出土する面を任意の遺構面としたが、土層状況とほぼ合致するものと考えられる。I区では1~4面、II・III区では1~3面の遺構面を検出した。遺構はI区では平安末~鎌倉時代の掘立柱建物、縄文時代貝塚、土壙墓3基、II区では古墳時代の住居跡5軒、土壙2基、縄文時代の土壙墓2基、III区では中世土壙3基、溝1条を検出した。

(2) 土層

I・II区に分けて土層の堆積状況を説明する。I区は第①層が耕作土、第②層が床土、第③層は灰黒色粘質土、第④層は灰黄色粘質土であるが、これは水田造成時の客土と考えられる。第⑤層は黄褐色粘質土で、この上面より柱穴を検出した。この面を第1面とした。この面の北側は谷の浸食で段落ちとなる。II区ではこの第②層は削平を受けた存在しない。II区第1面とは約40cmの段差がつく。又、第⑥層は黒灰色粘質土で、貝殻の破碎物を含んでいるが、この面においても柱穴等の掘り込みがみられるところから、これも遺構面とみなすことができる。

この第⑥層の下に縄文時代の貝層が存在する。貝層は北側が谷の浸食を受け、南側のII区では弥生~古墳時代の削平を受け段落ちとなっている。断面形は梯形状の堆積となって

L = 4.325 m	1	II区東側田河川内トレンチ土層名
L = 4.251 m	2	1. 黒灰色粘質土
L = 4.136 m	3	2. 灰質粘質土
L = 3.986 m	4	3. 青灰色粘質土
L = 3.855 m	5	4. 灰白色土層
L = 3.766 m	6	5. 青灰色粘質土
		6. 黄褐色粘質土 (真向風化土)

Fig. 8 調査区南側田河川土層模式図



加賀郡東山町地区（東心）



ムラハナ村十郷地区（東心）



日高郡田原町ムラハナ郷地区（東心）



日高郡田原町ムラハナ郷地区（東心）

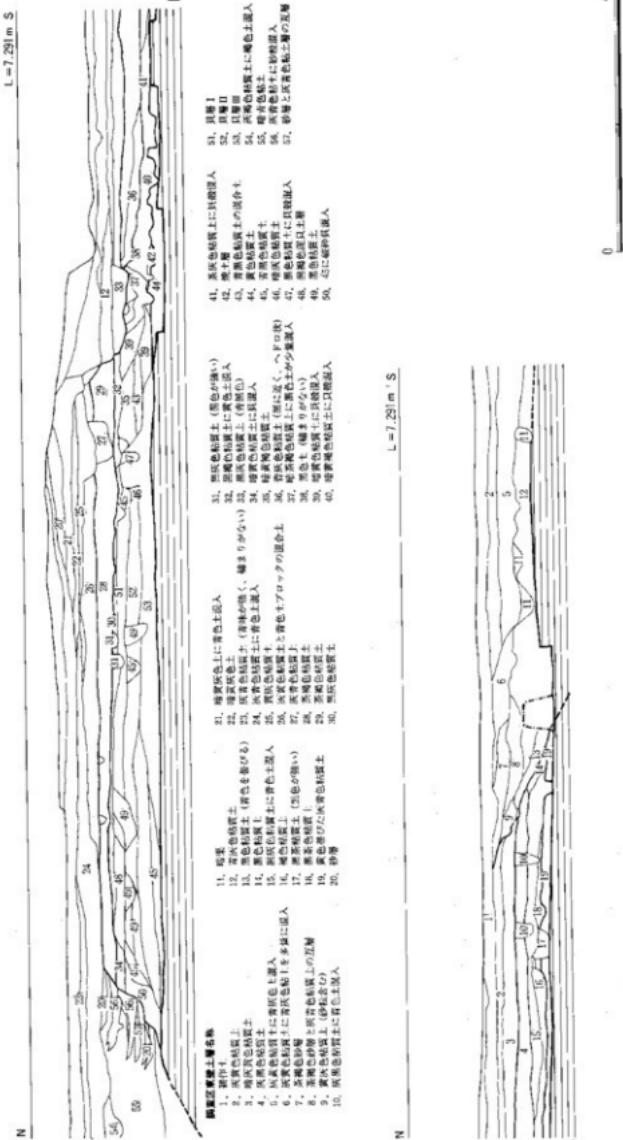
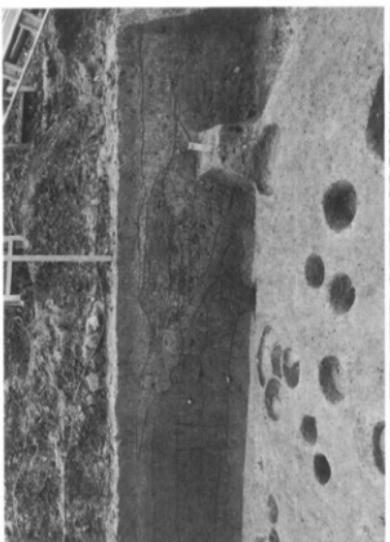
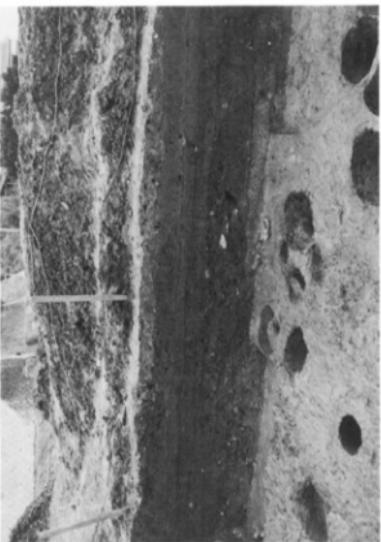


Fig. 9 莫泰区西侧壁面土层图(缩尺1/80)



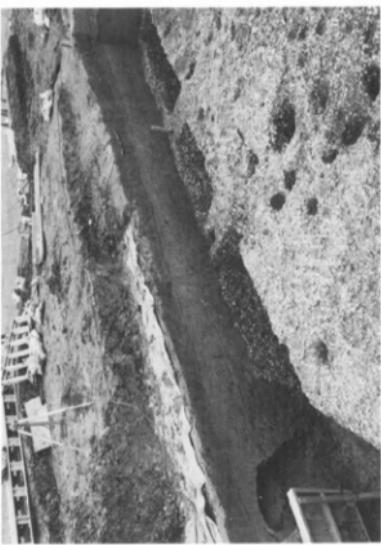
II区東端土壤状態①(西かく)



II区東端土壤状態②(西かく)



I区東端土壤状態①(西かく)



I区東端土壤状態②(北西かく)

いるが、貝塚の元来の高さ、幅を示すものではない。貝塚の詳細については次回に譲りたい。貝層の下は黄灰色粘質土であるが、幾つかのグリットで焼土面、及びPitを検出している。しかし、湧水が著しく調査まで至っていない。

III区は水田の地境にあたり、I・II区の水田面は高さ約40cmの段差がある。II区は耕作土の上面に一部客土がなされている。第①層は耕作土で、床土は薄く、北側では下位に青灰色粘質土が堆積する。第②層は暗灰黄色粘質土で、この層も耕作土と考えられ、北側に幅130cmの排水溝が存在する。この層の南側は大原川の氾濫による浸食を受けている。第③層は暗灰黄色粘質土、第④層は灰黒色粘質土である。第④層上面にてPitが掘り込まれる。この上面を第1面とした。この層は厚く、遺物を多く含む。下層の第⑩層は黄灰色粘質土であるが、第⑧・⑪層の黒色粘質土の遺構状の落ち込みやPit等の遺構が存在した。これを第2面とする。第3面は青味を帯びた灰黄色粘質土を遺構面としたが、遺構は小Pitのみで少なく、北側において縄文時代の獸骨・人骨を検出した。

II区の河川跡部分に設定したトレンチの土層はFig. 8に示したが、土層は水平堆積をしており、間層に砂層を含むなど河川の堆積状況を示している。深さ5.6mの第⑥層は頁岩質の風化土で、段丘面と考えられる。水田面からの深さ約7mを測る。

(3) 遺構面

Fig.10の遺構面模式図を参考にしていただきたい。I区第1面とII区第1面の高さは、II区が削平を受けているため比高差がある。I区第1面のレベルは標高約6.2m、II区第1面の標高は約5.6mを測る。I区第1面ではPit群を検出したが、これらは建物の柱穴と考えられる。柱穴内、及び整地層からは糸切り・ヘラ切り底の土師器皿・坏の他、龍泉窯青磁・中国製白磁が出土している。II区第1面では古墳時代の住居跡を検出した。中世遺構はI区からの連続性がない。I区第2面とII区第1面はほぼ同一の高さで、標高約5.9m～5.6mを測り、南側へわずかに傾斜する。遺構面は緩やかに南に傾斜し、II区ではPit群を検出した。出土遺物は弥生土器が多く出土した。I区のPitからは中世遺物の他、縄文土器も出土している。III区においては土壙SK01を検出したが、形状から溝状遺構の可能性をもっている。東西方向の溝とすれば中世遺構を区画するものであろう。II区の第3面では遺構は少ないが、北側に貝殻の破碎層が若干堆積し、又、遺構面において人骨、獸骨を検出した。I区の第3面は貝塚を形成している。貝塚についての詳細は別にゆずるが、I区第4面のレベルはII区第3面のレベルに一致する。この面を当初の基盤面とみることができよう。

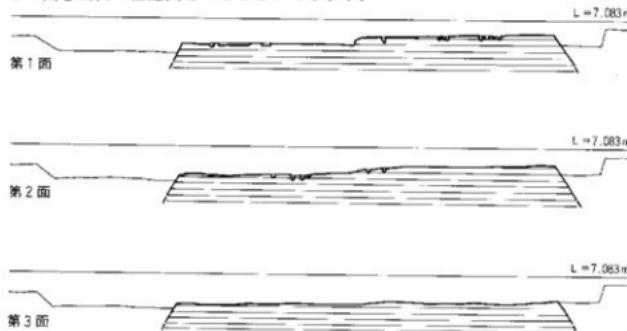


Fig.10 溝柵区第1~3遺構面の模式図



I区第1面 全景（北から）



I区第3面（貝層上面）全景（北から）

4. 遺構説明

I・III区	第1面の遺構	平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物、溝状遺構、谷
	第2面の遺構	柱穴
	第3面の遺構	縄文時代の貝塚、第4面の遺構 Pit及び焼土面
II区	第1面の遺構	古墳時代の土壙・住居跡、第2面の遺構 柱穴、第3面の遺構 縄文時代の土壙基

以下に各遺構について説明するが、縄文時代の貝塚及び出土遺物については後日に譲りたい。ここでは弥生時代から鎌倉時代について述べる。

I・III区第1面の遺構 I区の遺構面は第⑩層の黄褐色粘質土の上面で検出した。標高は約6.2mを測る。径24～135cmを測る柱穴、及び溝状遺構を検出した。いずれも覆土は暗褐色粘質土である。III区の遺構面の標高は6.2mを測る。柱穴群と土壙SK01を検出した。

I・III区第2面の遺構 遺構面は標高5.8mを測る。I区では貝塚上層の第⑩層の黒灰色粘質土の上面が相当する。土層図で見る限りこの面において掘り込みがみられるので生活面としたが、遺構の数は少ない。一部には第1面からの掘り込みもあると考えられる。柱穴群はまとまりを欠いており、掘立柱建物を把握することはできない。III区の遺構面はわずかに南側へ傾斜する。柱穴、及び土壙SK02・04を検出した。

II区第1面の遺構 第④層上面が遺構面と考えられる。標高約5.6mを測り、灰黒色を呈する。遺構は古墳時代の住居跡5軒を検出した。

II区第2面の遺構 遺構面は標高約5.3mを測り、第⑩層の黄褐色粘質土の上面において遺構を確認できた。遺構は柱穴群を主体としており、他に土壙SK03・05の2基が存在する。

(1) 掘立柱建物 (SB)

I・III区の第1面の柱穴群は一定の空間をもち、且つ、柱筋のとおる柱列が存在するが、現時点での建物の把握は困難である。又、II区第2面の柱穴群は弥生時代を中心とするが、現状では建物を把握できなかった。

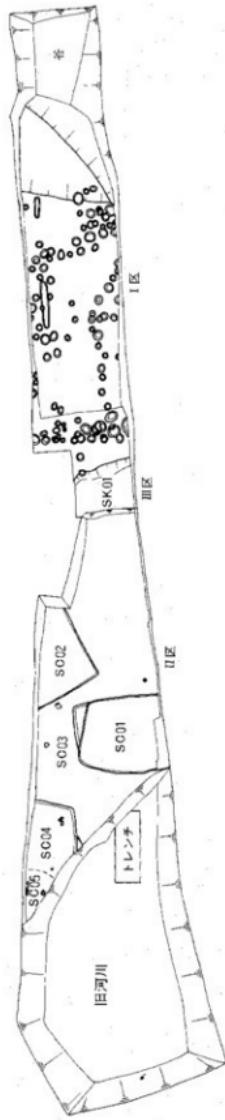
(2) 土壙 (SK) (Fig.12～15)

II区第2面では土壙SK03・05、III区第1面では土壙SK01、第2面では土壙SK02・04を検出した。
SK01 (Fig.12) II・III区の境に位置し、II区の調査時点に土壙の南側を削平しているため、全体の形状は不明である。東西方向の溝の可能性もある。上面は削平を受けている。平面形は不明であるが、断面形は逆梯形を呈するものと考えられる。現存長243cm、現存幅145cm、深さ19cmを測る。覆土は黒灰色粘質土を主体としている。出土遺物は弥生土器・土師器皿・瓦器碗・白磁碗・石斧・敲打具・砥石などが出土している。

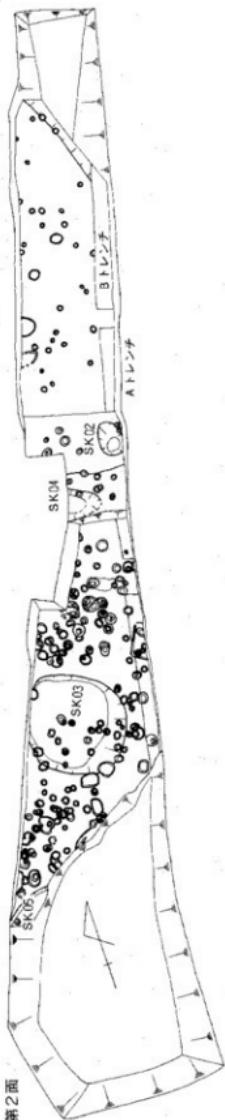
SK02 (Fig.12) III区第2面において検出した。北側境界地にある。上部は削平を受けている。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形状である。現存長130cm、底面の長さ50cm、幅95cm、深さ20cmを測る。覆土は黒灰色粘質土を主体としている。出土遺物はない。

SK03 (Fig.13) II区第2面において検出した。一部が南側の調査区境界にかかる。上面は削平を受けている。平面形は不整隅丸方形を呈し、断面形は浅い皿状を呈する。現存長約4m、底面の長さ

第1面



第2面



第3面

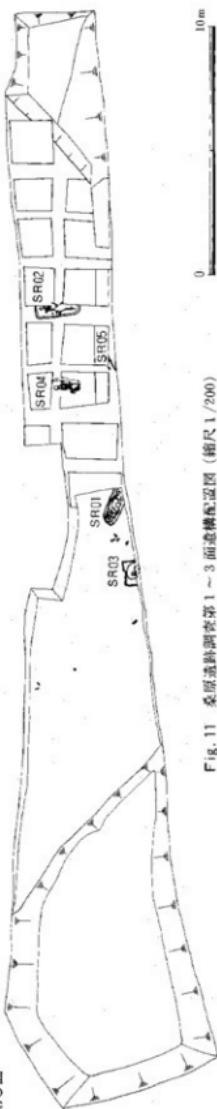


Fig. 11 桑原通跡調査第1～3面標記位置図 (縮尺1/200)

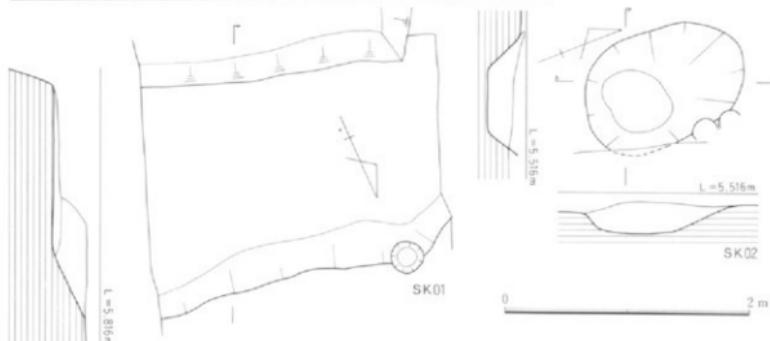


Fig.12 土壌SK01・02実測図 (縮尺 1/40)



II区第2面全景（南から）



II区第2面全景
(北から)



II区第1面全景（南から）



II区第1面全景（北から）

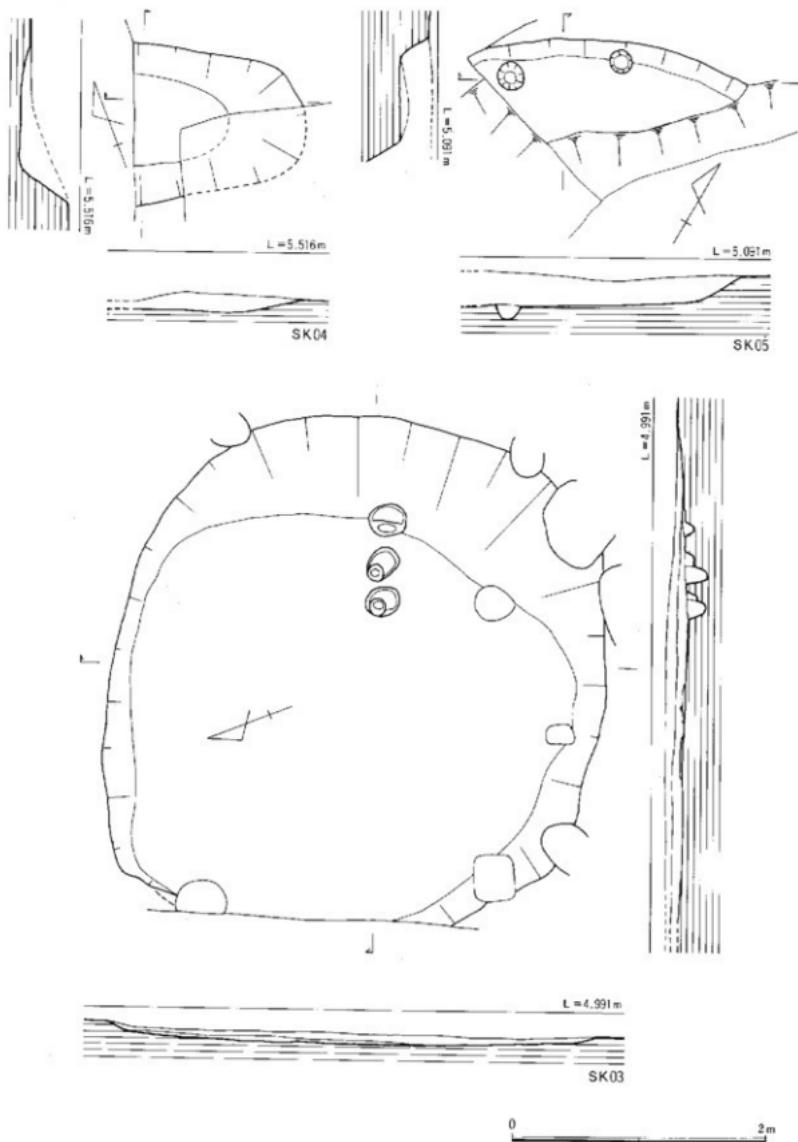


Fig. 13 土壌 S K03~05実測図 (縮尺 1/40)

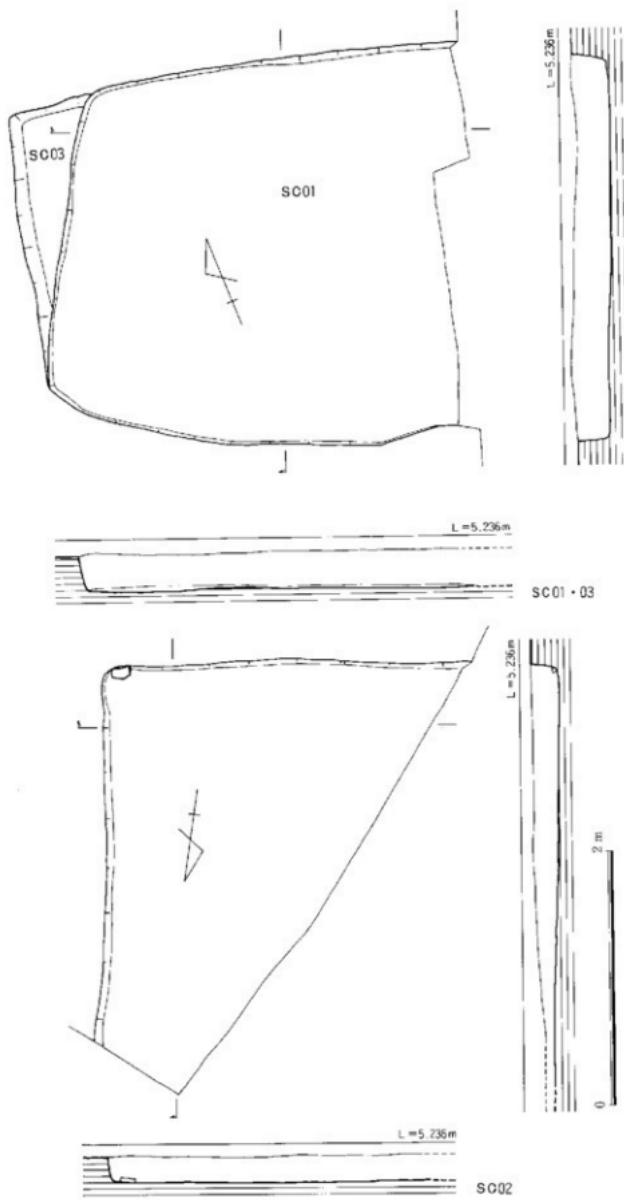


Fig. 14 住居路SC01~03実測図 (縮尺1/40)

3.5m、幅3.9m、深さ15cmを測る。覆土は黒灰色粘質土を主体としている。出土遺物はない。

S K 0 4 (Fig.13) III区第2面で検出したもので、SK01の下位にある。当初はPit44と称した。西側境界地にあるため、全体形は不明である。平面形は不整橢円形と考えられ、断面形は逆梯形状を呈する。現存長135cm、最大幅130cm、深さ38cmを測る。覆土は黒灰色粘質土である。遺物は縄文土器・弥生土器が出土した。

S K 0 5 (Fig.13) II区第2面で検出した。南側の旧河川の浸食で遺構の大半を失っている。住居跡SC05の真下にある。当初はPit85と称し、遺物を取りあげた。全体形は不明である。現存最大長130cm、現存最大幅90cm、深さ20cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土である。遺物は土師器高坏の他、山陰系の瓶が出土している。

(3) 住居跡 (SC) (Fig.14・15)

全てII区第1面にて検出した。遺構面の上層は灰黒色を呈しており、住居跡の識別は困難を極めた。当初は包含層と考えていたが、完形に近い遺物が多量に出土するため数回に亘り遺構面の精査を行ったところ4～5軒の遺構を検出した。しかしながら柱穴・炉等が存在しないことなど住居跡と認定するには疑問が残るところであるが今後の調査に委ねたい。ここでは土器等の遺物がまとまっているので住居跡として報告する。

遺構面が削平を受けていたため住居跡の遺存状態は悪い。調査範囲が狭いため各住居跡の全体形は明らかではなく、SC04・05は切り合い関係が不明であった。

S C 0 1 (Fig.14) 調査区東側の境界地に位置するため全体形は不明であるが、平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。SC03を切っている。削平が著しく壁の遺存状態は悪い。現状では最大長は310cm、最大幅は306cm、壁の高さは32cmである。柱穴は検出できなかった。覆土は灰黒色粘質土である。覆土からは弥生時代中期の土器片の他、古墳時代土師器壺・甕・高坏・支脚・磨石等が出土した。

S C 0 2 (Fig.14) 調査区西側の境界地に位置するため全体形は不明であるが、平面形は長方形を呈するものと考えられる。削平が著しく、壁の遺存状態は悪い。現状での最大長は340cm、最大幅は330cm、壁の高さは20cmである。柱穴は検出できなかった。覆土は灰黒色粘質土である。覆土からは弥生時代中期の土器片の他、古墳時代の土師器高坏が出土した。高坏の1点はSC01出土の高坏と接合した。

S C 0 3 (Fig.14) 住居跡SC01に切られるため全体形は不明であるが、平面形は長方形を呈するものと考えられる。削平が著しく、壁の遺存状態は悪い。現状での最大長は212cm、最大幅70cm、壁の高さは33cmである。覆土は灰黒色粘質土である。出土遺物は弥生時代の土器片、古墳時代の土師器片であった。

S C 0 4 (Fig.15) 調査区南西側の境界地に位置し、南側の旧河川の浸食を受けているため全体形は不明である。平面形は長方形を呈するものと考えられる。住居跡SC05と切り合い関係にあるか、境界が定かではない。削平が著しく、壁の遺存状態は悪い。現状では最大長が228cm、最大幅は220cm、壁の高さは15cmである。柱穴は検出できなかった。覆土は灰黒色粘質土である。覆土からは弥生時代中期の器台・支脚片、古墳時代の高坏の他埴平石斧が出土している。

S C 0 5 (Fig.15) 調査区南西側の境界地に位置し、全体形は不明である。削平が著しく、壁の遺存状態は悪い。SC04との境は、点線で示したラインが切り合いと考えられる。覆土は暗茶褐色粘質土である。覆土からは古墳時代の土器がまとめて出土しており、土師器壺・器台・高坏がある。特に器台は瀬戸内系の土器である。又、第2面で検出した土壙SK05は、SC05の丁度真下に存在する遺構であるが、このSK05の規模は大きく形状等からみてSC05と同一遺構と考えることも可能である。

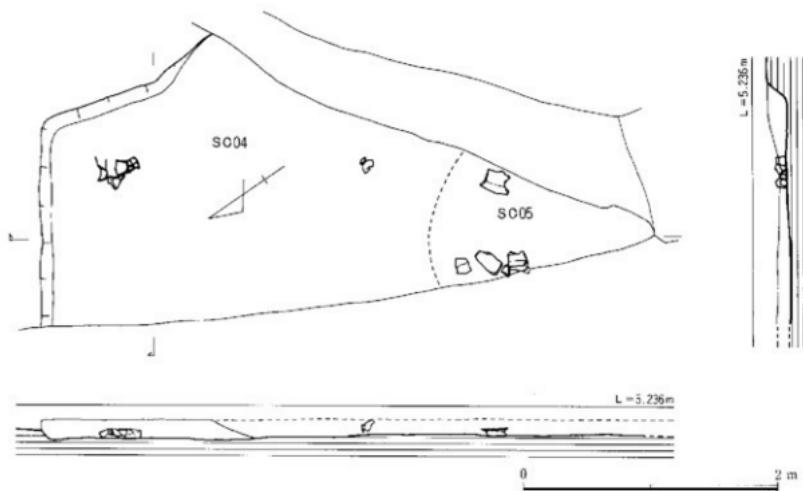


Fig. 15 住居跡SC04・05実測図（縮尺 1/40）

5. 遺物説明

中世遺物は土師器皿・壺、白磁皿・碗、同安窯系青磁皿・碗、中国陶器、土師質上器鉢、滑石製石鍋等が出土。古墳時代は5～6世紀の土師器甕・鉢・高壺、須恵器壺・蓋がある。弥生時代は包含層等から多量の磨製石斧未製品、及び剝片の他、敲打具、弥生時代前期～中期の甕・壺が出土。縄文時代は人骨6体分の他、シカ・イノシシ等の獣骨、貝輪、縄文土器、打製石器がある。

尚、縄文時代の遺物説明は、古墳時代や中世遺構への流れ込み、混入遺物については掲載したが、貝塚に伴う遺物は後日に譲りたい。

(1) I 区北側谷出土遺物 (Fig. 16)

谷の開析によってI区第1～3面は浸食を受けており、谷に堆積したヘドロ状の土壌の中から縄文時代～鎌倉時代の遺物が出土している。図示した他に玄武岩製の磨製石斧、剝片が多数出土している。

1は弥生土器の甕、2は縄文土器の鉢底部、3は中国製白磁碗II類、4は須恵器壺片である。5・6は把手であるが、日本国内の瓶の把手とは形状・胎土が違っており、朝鮮系と考えられる。5は鉢、6は甕である。7・8は断面形が隅丸の方柱状を呈した製鐵関係の遺物である。9は石臼の上臼片である。

(2) I 区包含層出土遺物 (Fig. 17)

10～31は第1面下包含層出土、32～37は第2面下包含層出土である。



II区第1面SC01(西から)



II区第1面SC02(西から)



II区第1面SC03(西から)



II区第1面SC04(西から)

第1面下包含層出土遺物 (10~31) 10~15は土師器で、いずれも糸切り底である。10~13は小皿で、12は脚付である。14~15は壺である。10・11・14・15の外底部に板目圧痕がある。16~17は瓦器椀で、内外面はヘラミガキを行う。16の高台は小さく、17は断面三角形を呈する。18~20・24は中国製白磁碗、27~29は中国製白磁皿である。27・28の内底にはヘラ彫りの草花文がある。21・22・25・26は中国製の青磁碗で、21・26は龍泉窯系、22・25は同安窯系、23は中国製陶器壺、30は滑石製石鍋のミニチュアで、外面のケズリは丁寧である。2ヶ所に耳をもっている。31は長方形状の砥石である。

第2面下包含層出土遺物 (32~37) 32は8世紀の須恵器壺である。33・34は中国製青磁皿で、33は龍泉窯系、34は同安窯系である。35・36は鉄製品で、35は刀子、36は鉄釘である。37は砥石で、上面が凹みになっている。

(3) I区第1・2面SP出土遺物 (Fig.18)

第1面検出のPitから出土した遺物は39・41・43~45・47・51・53で、他は第2面検出のPitより出土した遺物である。

38はS P108、39はS P54、41・47はS P62、40・42・49はS P111、43はS P51、44はS P48、45・51はS P39、46はS P101、48はS P107、50はS P118、52はS P124、53はS P40出土である。

38~40は土師器で、いずれも糸切り底である。42・43は瓦器椀で、いずれも内外面にヘラミガキを施すが、42の高台は小さく低い。口縁部内側に沈線が入る。42は楠葉産である。41は瓦器皿で、糸切り底である。44・50・51は中国製白磁で、44は皿、50・51は碗である。44の内底にはヘラ彫りの草花文があり、外底には墨書がある。50の内面には櫛描文が施される。51は中国製玉縁自磁碗のIV類である。45~49は中国製青磁で、45・46は皿、47~49は碗で、いずれも同安窯系と考えられる。45・46の内底には猫搔文を施し、47~49の体部外面には櫛描文、49の内面には猫搔文とヘラ彫りの雲文を施している。52は中国製陶器の捏鉢、53は土師質土器の鍋である。

(4) II区第1・2面出土遺物 (Fig.19~23)

S C01出土遺物 (54~62) 54~60は土師器である。56は二重口縁の壺で、瀬戸内系と考えられる。54・57は壺、55は甕で、54・55の内面はヘラケズリを施す。57の内面はナデ調整である。58~60は高壺である。58は壺部で、体部と底部の境は丸味をもち、内側に段をつけている。59・60は脚部で、59

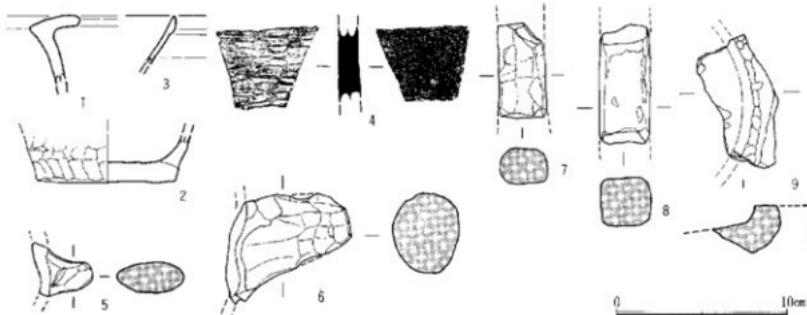
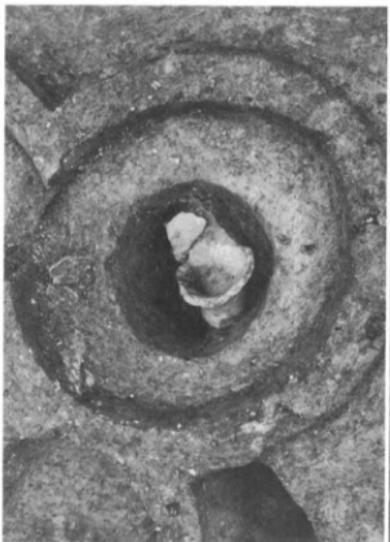
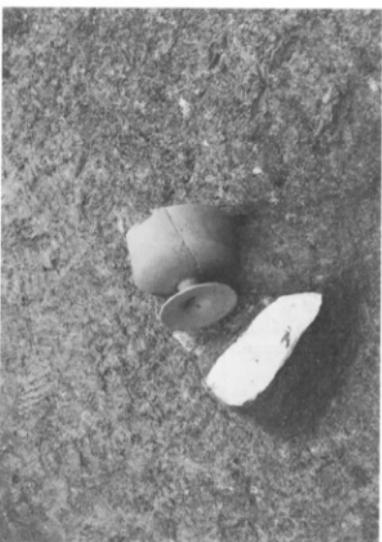


Fig. 16 I区谷出土遺物実測図 (縮尺 1/3)



II区第2面S-P4 (南から)



II区切妻屋中腰部出土残器 (北から)



II区第3面石片出土状態 (西から)



II区第3面骨片出土状態 (南西から)

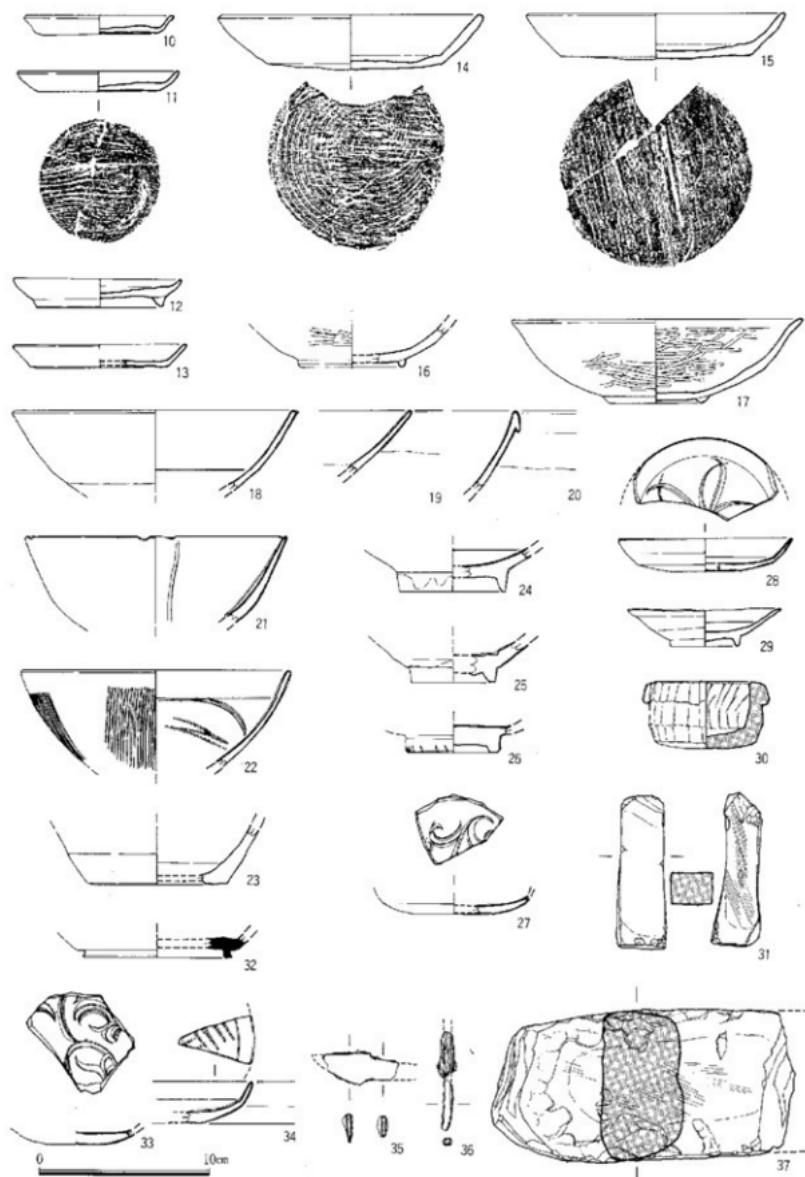


Fig. 17 I区包含層第1・2面出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

は裾部との境に径1.0cmの穿孔がある。61は盃形器台である。62は玄武岩製の磨石である。

S C 0 2出土遺物 (63~70) 63~66は弥生土器、67~70は土師器である。63~65は甕、66は支脚である。67~70は高杯で、67はSC01出土の58の高杯と接合する。68の坏部は体部と底部の境が不明瞭である。これも在地土器とは考えられない。

S C 0 4出土遺物 (71~75) 71・72は土師器、73・74は弥生土器である。72~74は器台、71は台付鉢である。75は玄武岩製で、局部磨製の扁平な石斧である。

S C 0 5出土遺物 (76~85) 76・78は長胴壺、77・79~82は甕である。いずれも土師器であるが、在地性が強い。76・78は頭部に三角突帯を貼付する。78は刻目をもっている。76・80・81の外面には平行叩きが施され、内外面タテハケ調整である。82の内面はヘラによるヨコナデ調整である。83は高杯

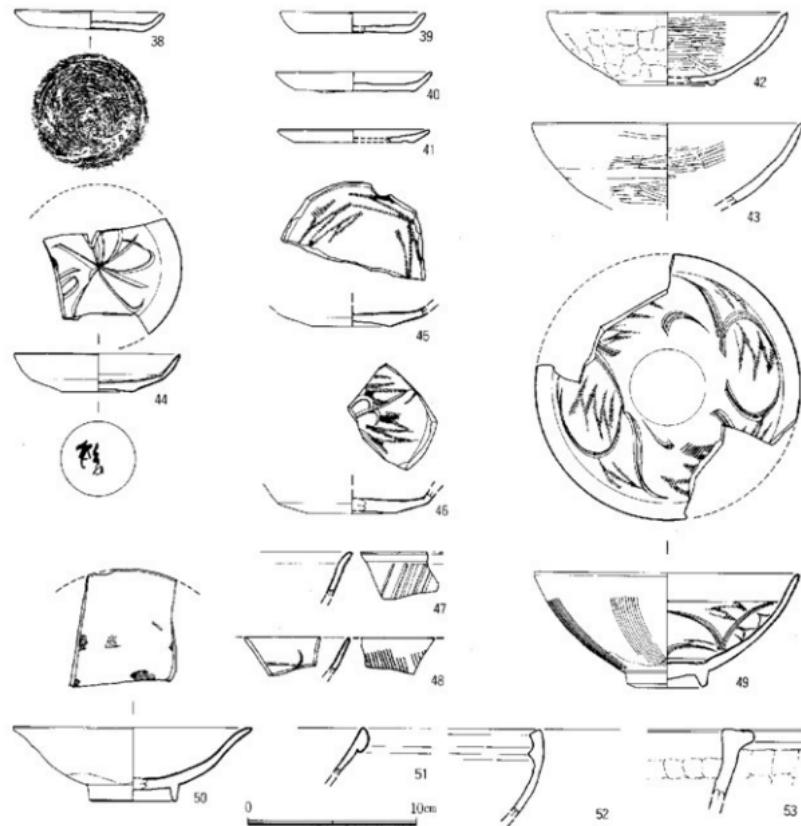


Fig. 18 I区第1・2面S P出土遺物実測図（縮尺 1/3）

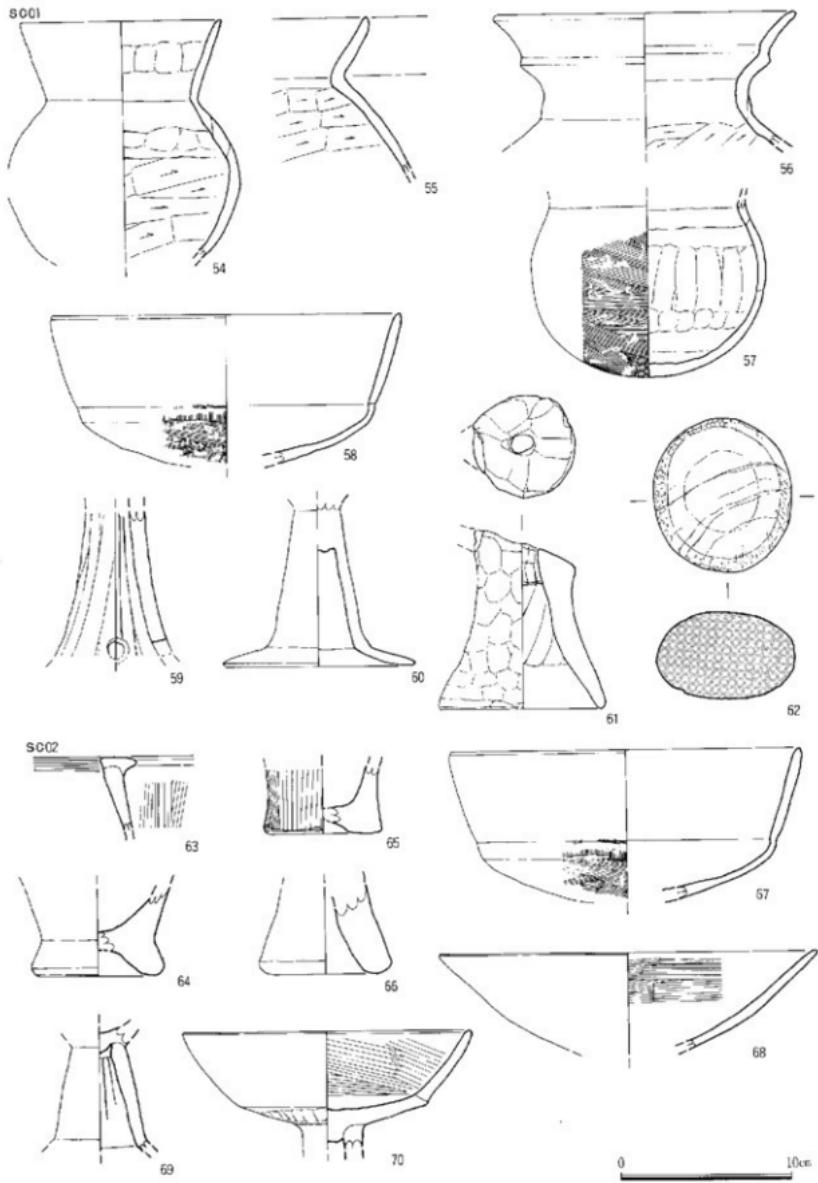


Fig. 19 SC01・02出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

の器形に似た器台で、台部の外面には段をもつ特徴がある。瀬戸内系の土器である。84・85は高坏の脚部である。84の裾部は緩く外反する。

S K 0 5 出土遺物 (86~92・95・232) 86は高坏で、脚の裾部は内弯する。筒部と裾部との境には穿孔が3ヶ所ある。SC 05出土の85の高坏と接合した。232は全体の器形が不明であるが、山陰系の截頭円錐形の甌と考えられる。把手は類例よりも長く、最大長19cm、断面形は不整円形で最大径3.3cmを測る。内面は粗いハケ調整、外は大位にタテハケ調整で、一部に印痕あり。87~92・95は弥生土器で、87~91が甌、92が高坏、95は壺である。

P i t 出土遺物 (Fig.23) 93はS P 5、94はS P 33、96はS P 64出土である。93・94・96は弥生土器で、93・96は甌、94は壺であろう。97~100は石製品で、97は石斧未製品、100は砾石、98は凹石、99は敲石であろう。

(5) II区包含層出土遺物 (Fig.24~27)

101~109は第1面下包含層出土、他は第2面下包含層から出土した。

第1面下包含層出土遺物 (105~109) 105~106は弥生時代前期の甌、108は中国製白磁碗のIV類である。107はヘラ切り底の土師器皿、109は唐津焼の陶器鉢で、二次的に火を受けている。101~104は縄文土器の鉢である。

第2面下包含層出土遺物 (110~176) 110~123は縄文土器の鉢、124~133は弥生土器である。124・125・128・129は甌で、124は口縁部上面を肥厚させた大型の甌、125は小型甌である。126・127・130~133は甌で、126は三角突帯状の口縁部である。134~158は古墳時代の土師器で、134~139は鉢である。138は指頭圧痕が顕著で、手づくね土器である。139の鉢は口縁部がくの字形である。140~147は甌で、140・145~147の口縁部は内弯し、140・141・144~147の体部内面はヘラケズリ調整である。148は高坏形の器台で、瀬戸内系である。149~159は高坏で、149・150の坏部は深く、体部と底部の境に特徴がある。154は坏部で、底部は平底状を呈し、体部との境は強い棱をもつ。155~159は高坏の脚部。160は台付鉢の脚であろう。161は瓦器皿、162はヘラ切り底の土師器皿である。163・164は瓦器柄で、163は口縁部内側に沈線をもつ。163・164は楠葉産であろう。165~167は中国製白磁碗である。166は扁平な玉縁口縁の白磁碗で、定窯系であろう。168~170は須恵器の甌片である。171~173は手づくね土器で、171・172は坏・高坏のミニチュアである。174~176は土製品で、174は断面が楕円形の棒状を呈し、下部を

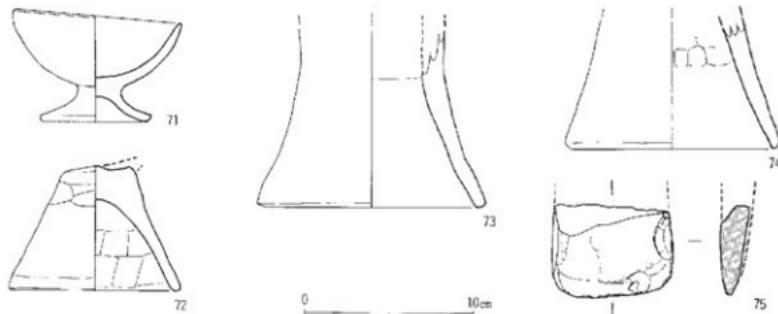


Fig.20 SC04出土文物復原図 (縮尺 1/3)

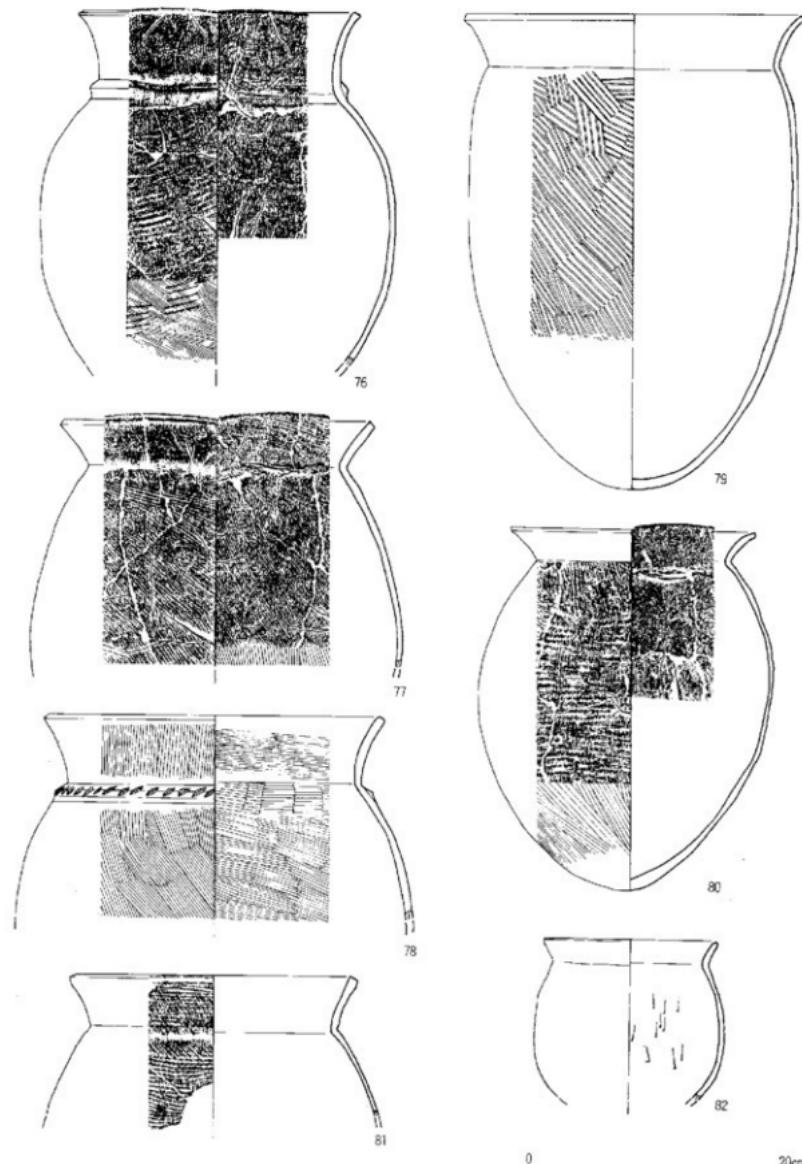


Fig.21 SC05出土遺物実測図 (縮尺 1/4)

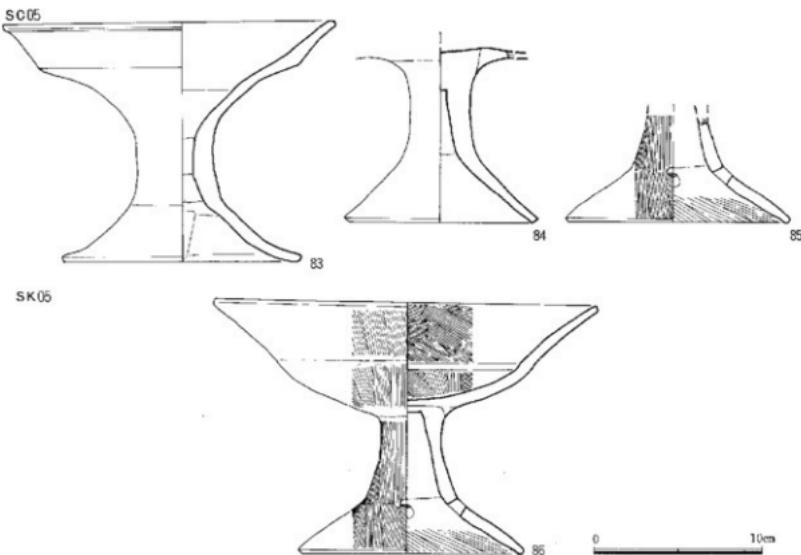


Fig. 22 SC05, SK05出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

欠く。175は土玉状で、土弾であろうか。176は平面形が不整円形を呈し、中央部分を両側から穿孔する。紡錘車にしては肉厚である。

(6) III区第1面出土遺物 (Fig. 28)

S K 0 1出土遺物 (177~192) 177~182は弥生時代中期の土器である。177~180・182は逆L字形の口縁部、181は三角突尖状の貼付口縁部である。183は中国製白磁碗IV類である。184は瓦器碗で、内外面はヘラミカキを施している。高台は断面コの字形で、肥厚している。185は瓦器皿で、歪みが強く、体部と底部の境は強い棱を作る。186・187は土師器皿で、いずれも糸切り底である。188・189は局部磨製の扁平石斧で、石材は玄武岩である。190は敲石、191・192は砥石である。

P i t 出土遺物 (Fig. 28) 193はS P 44、194・195・200はS P 6、196はS P 20、197はS P 3、198はS P 37、199はS P 34出土である。

193は弥生土器の壺片である。194~196は土師器の糸切り皿で、194・195には200の青磁碗が共伴する。200は中国製青磁碗で、同安窯系である。外面は櫛描文で、内面に猫搔文とヘラ彫りの雲文がある。197は白磁皿、199は白磁碗で、いずれも中国製である。198は同安窯系の青磁皿である。

(7) III区包含層出土遺物 (Fig. 29)

201~218は第1面下包含層出土、219~222は2面下包含層出土である。

第1面下包含層出土遺物 (201~218) 201・202は弥生土器の壺の口縁部、203は底部である。204~207は糸切り底の土師器で、204は壺、205~207は皿である。210~212は中国製の白磁碗、213は白磁皿である。208・209は瓦器碗、214は中国製陶器の壺である。216・217は土製品で、製鉄関係の遺物である。

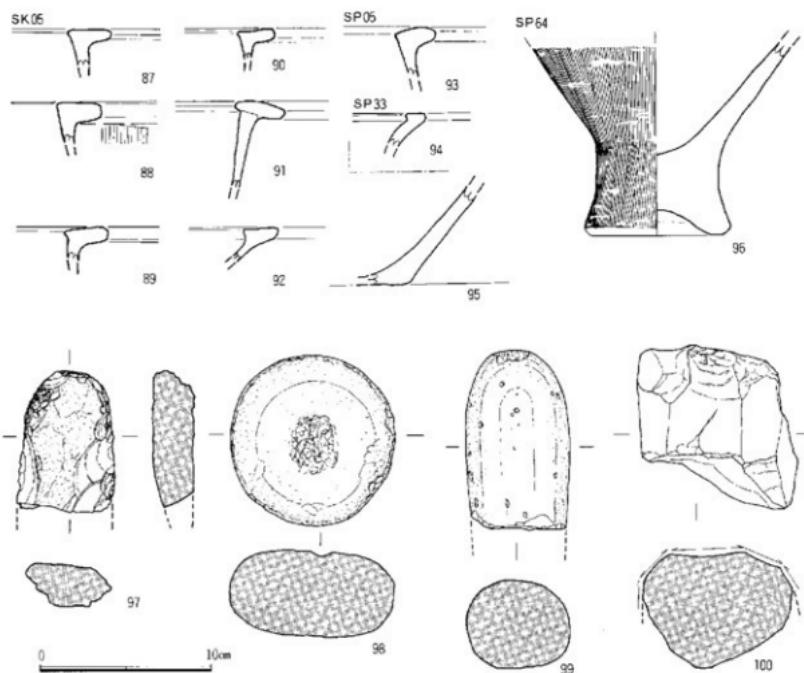


Fig.23 II区SK05、SP出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

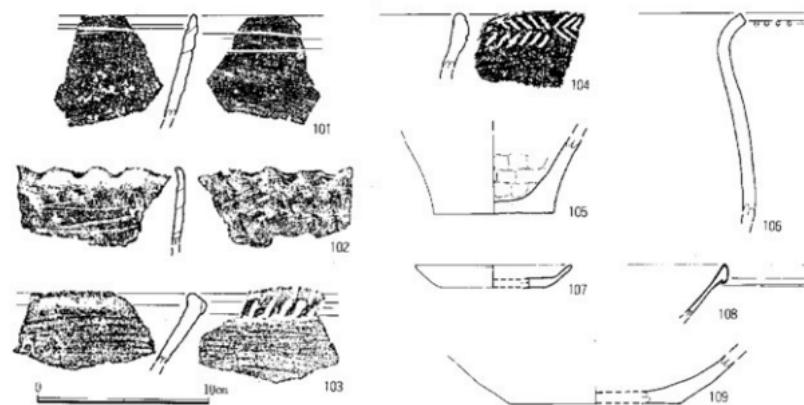
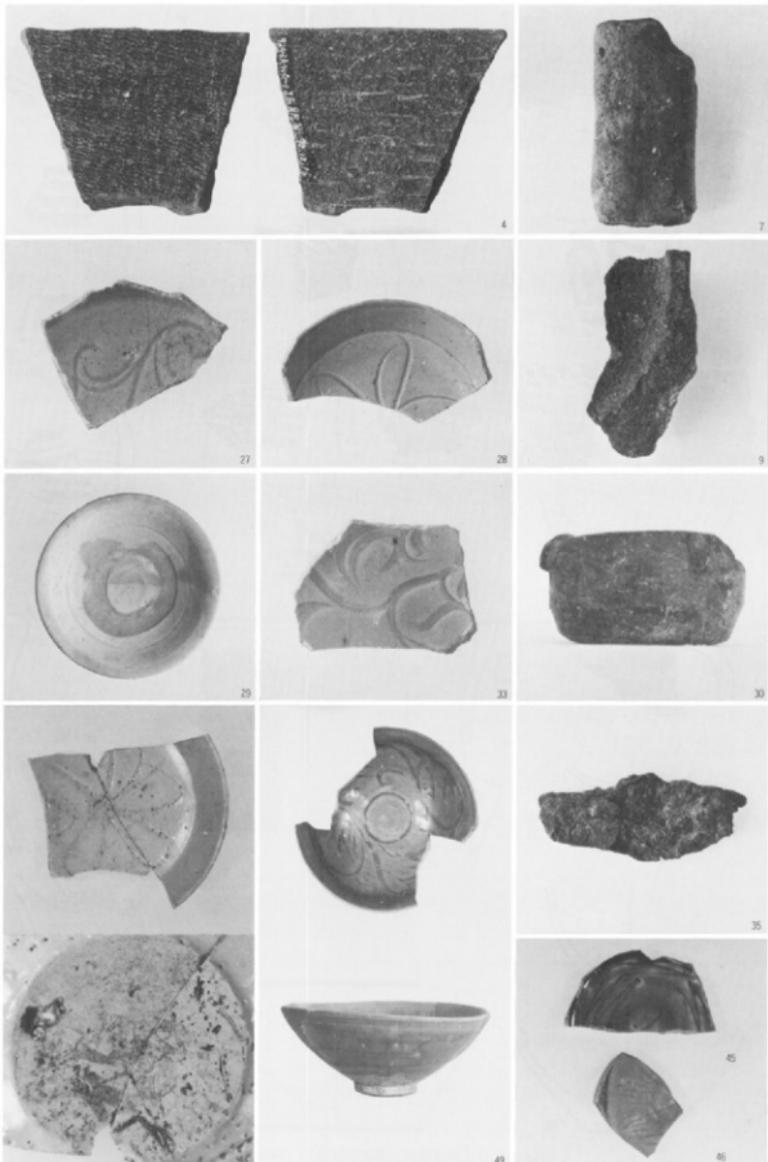


Fig.24 II区包含層出土遺物実測図① (縮尺 1/3)



I区谷、包含層、SP出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する

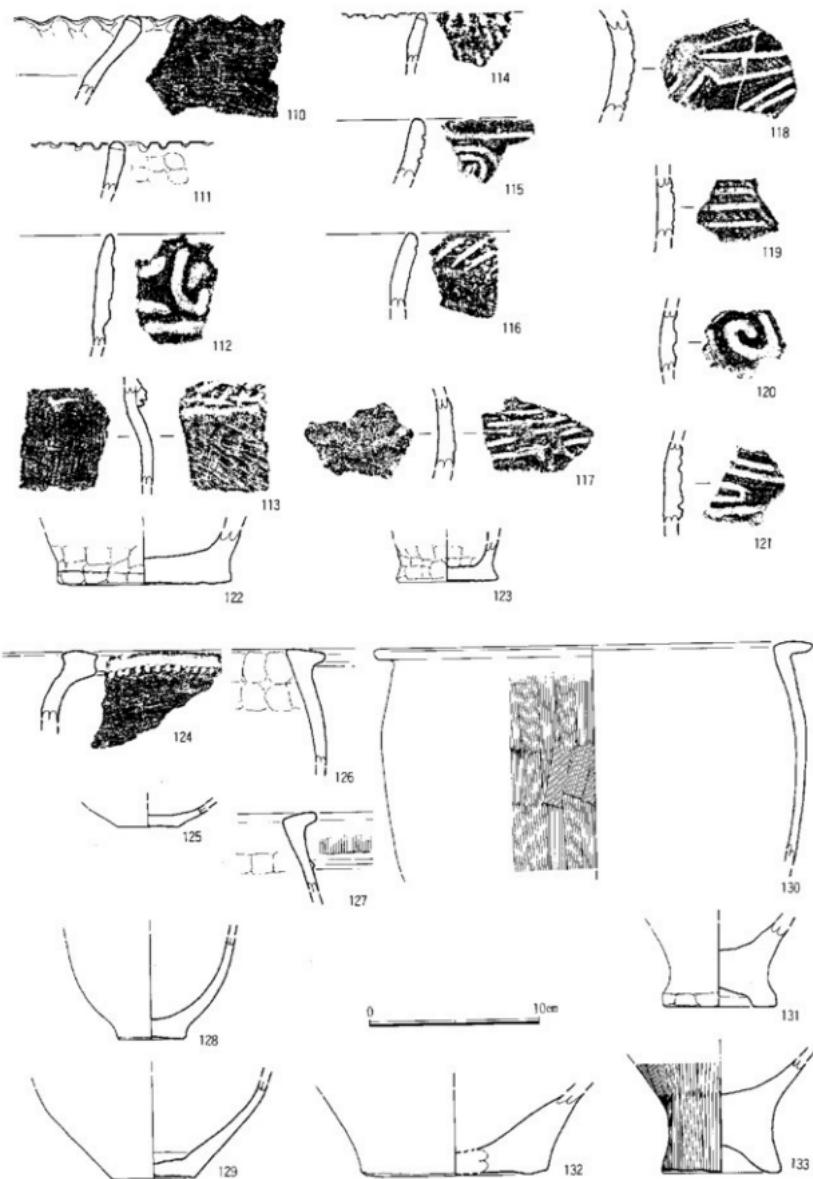


Fig. 25 II区包含层出土遗物实测图② (缩尺 1/3)

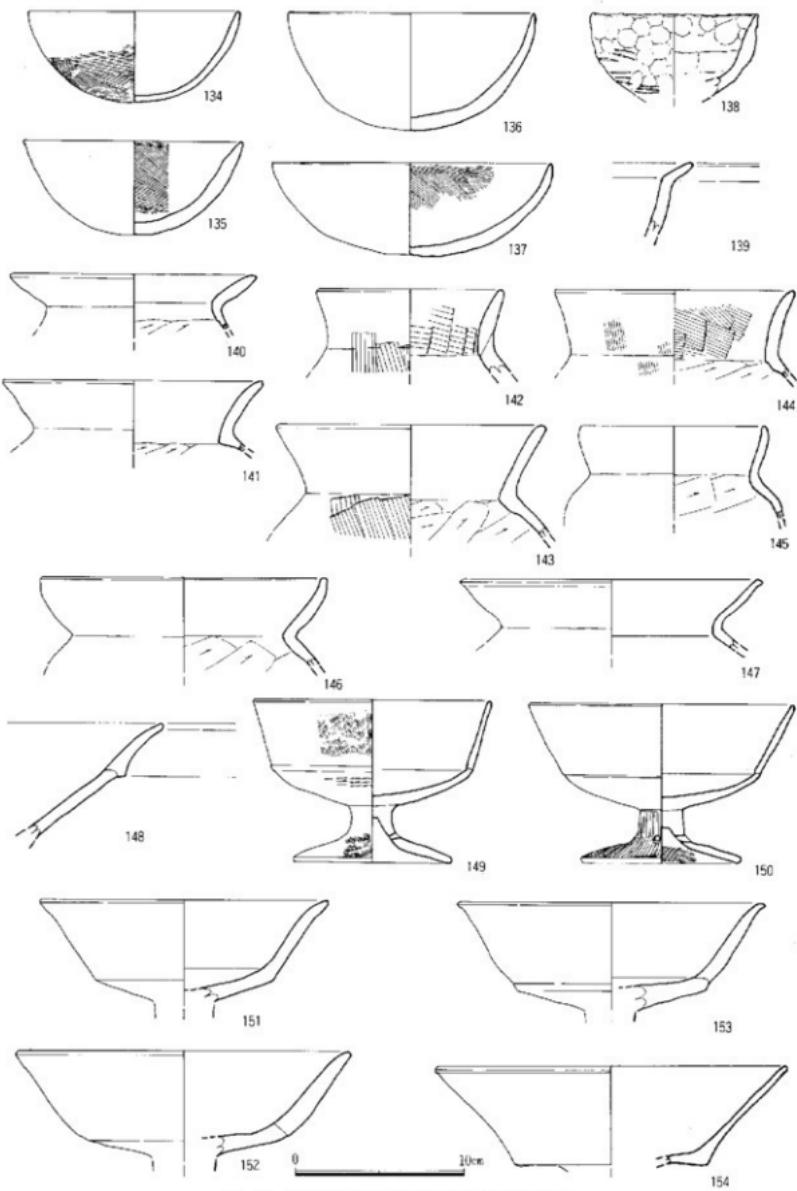


Fig. 26 II区包含層出土遺物実測図③ (縮尺 1/3)

う。218は杓子形土器の把手で、朝鮮系と考えられる。215は貨幣で、中国北宋の「皇宋通寶」である。
第2面下包含層出土遺物 (219~222) 219~222は弥生時代中期の甕の口縁部である。221の口縁部は三
 角突帯状を呈する。

(8) 表土出土遺物 (Fig.29)

223~225は弥生時代中期の甕の口縁部、226は須恵器の甕片である。227・228は中国製白磁碗、229

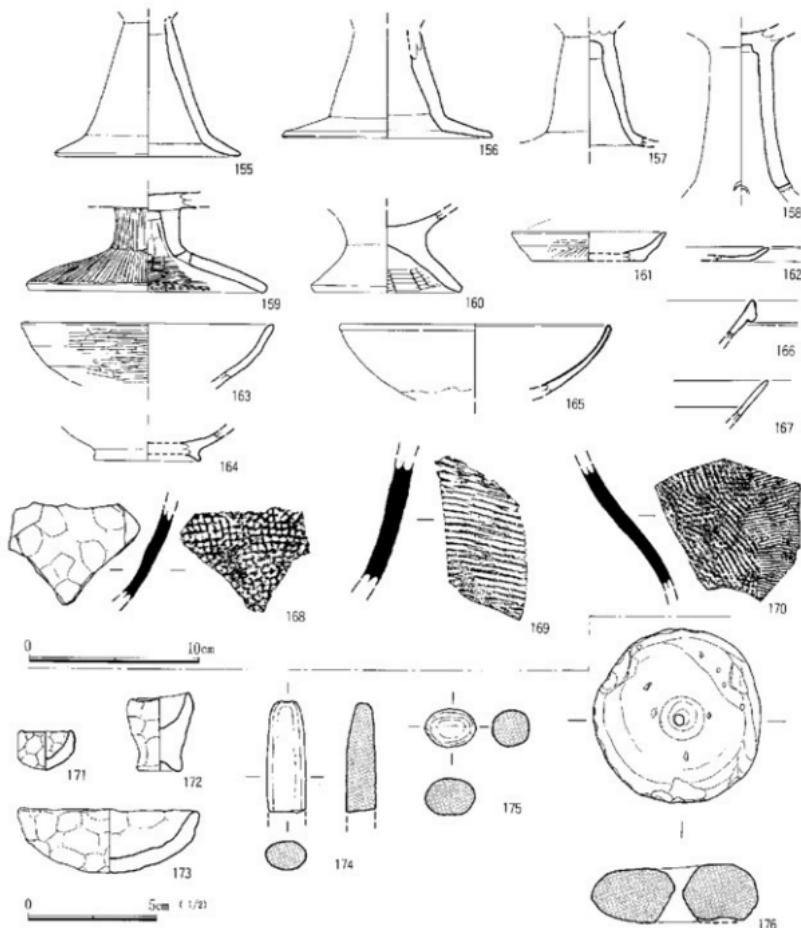
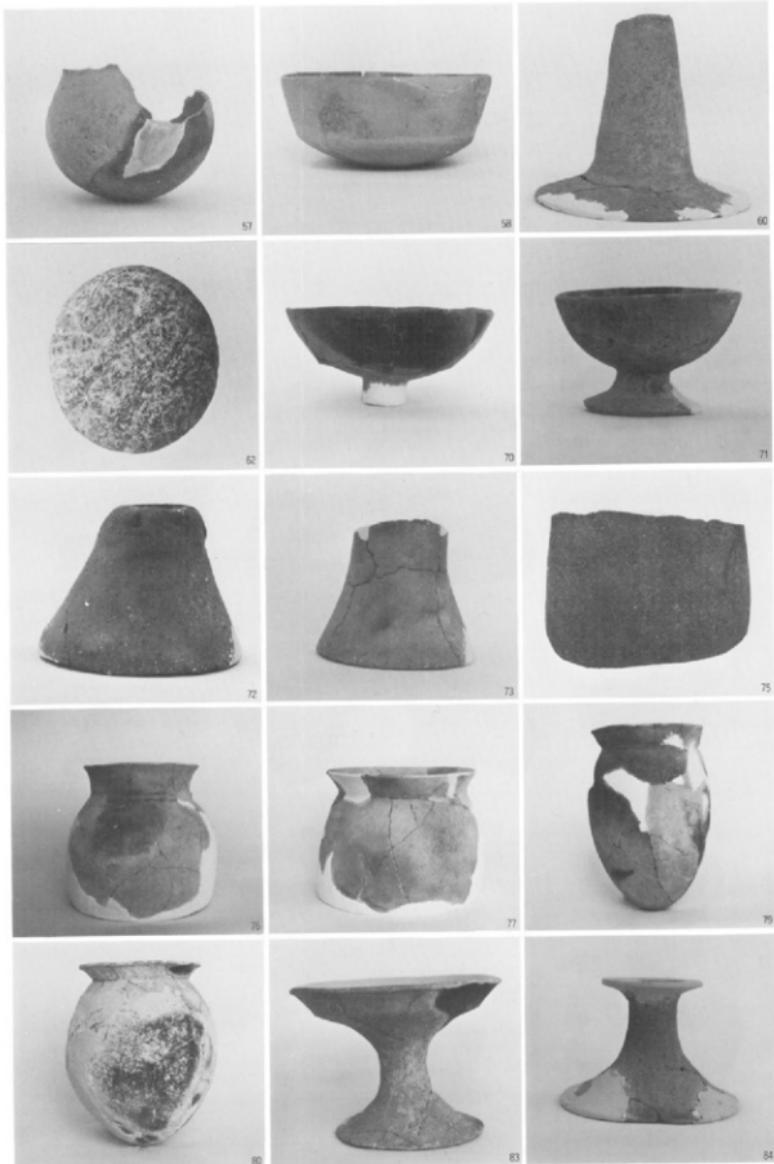
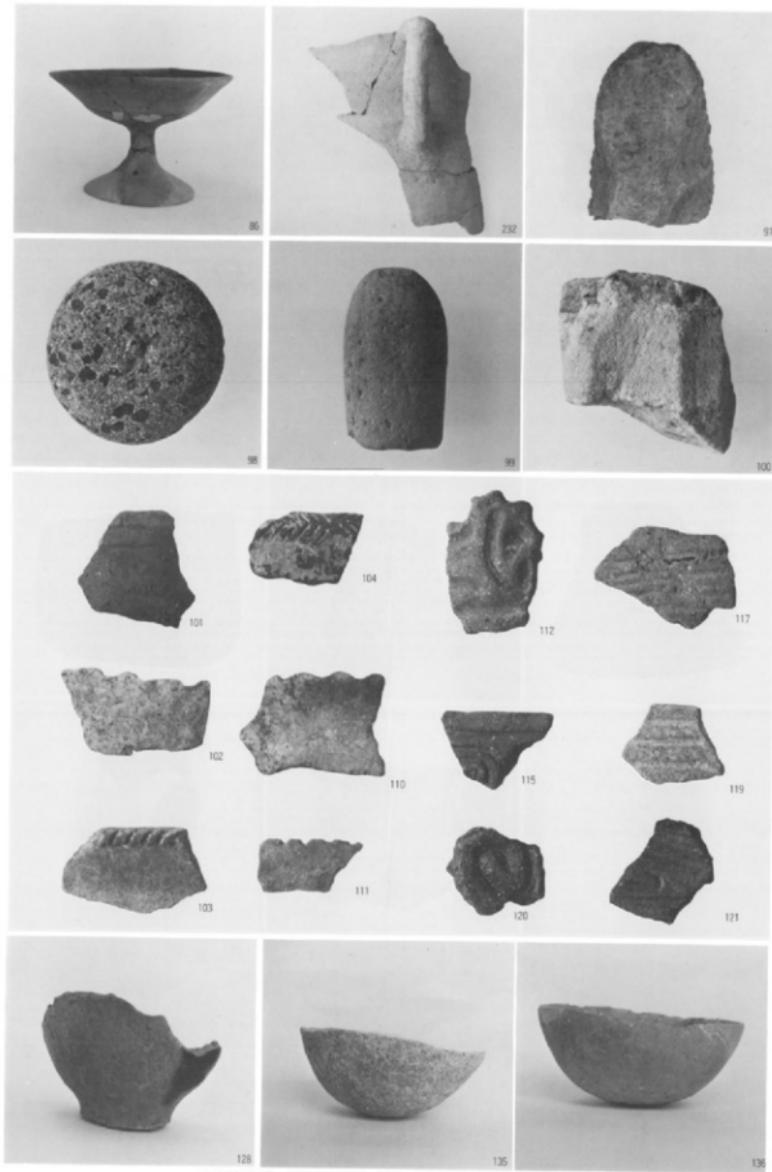


Fig.27 II区包含層出土物実測図④ (縮尺 1/3・1/2)



S C 01-05出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する



II区包含層、III区 S K01・S P・包含層、表土出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する
232はSK05出土

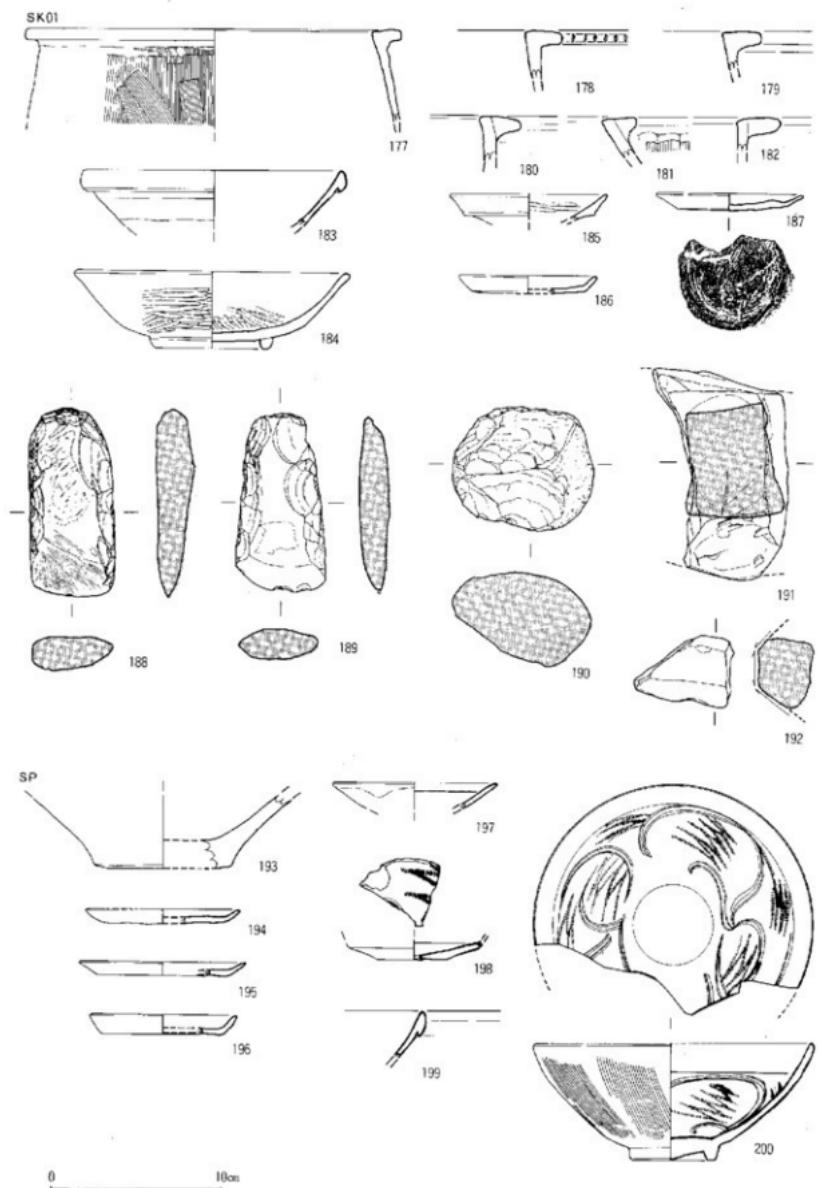
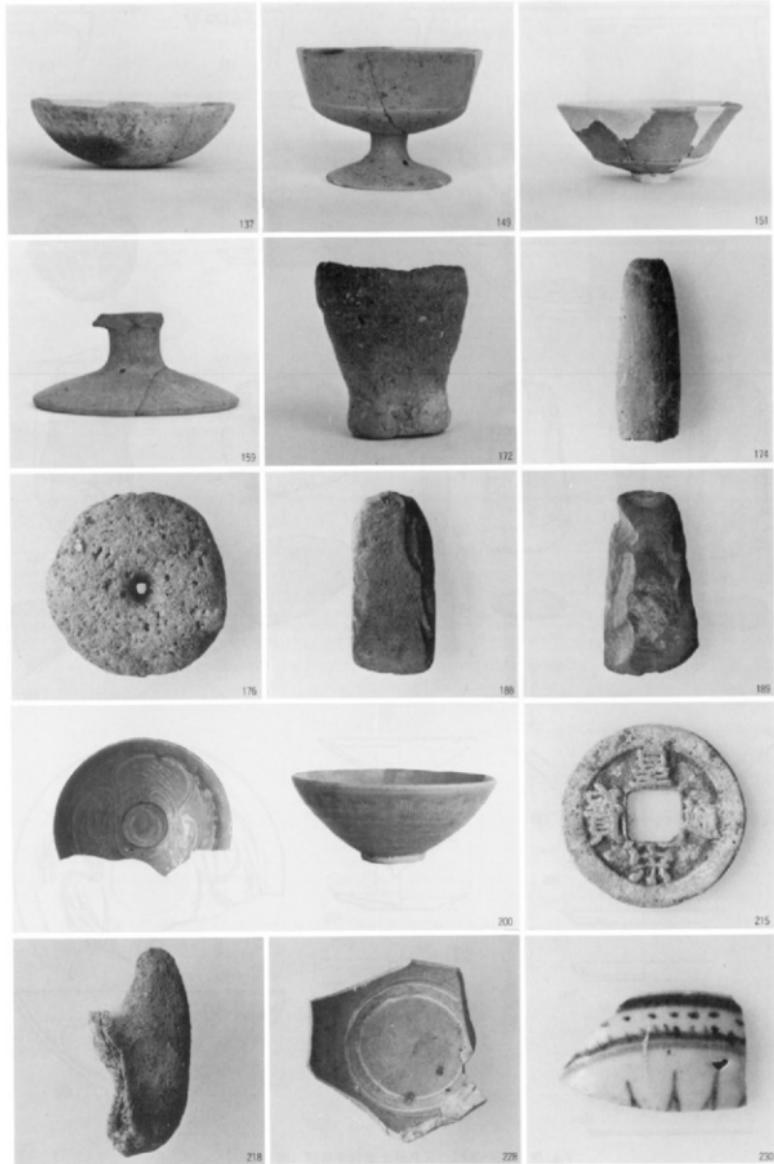


Fig. 28 III区SK01、SP出土遺物実測図（縮尺 1/3）



II区包含層、III区SK01・SP・包含層、表土出土遺物

*数字は実図の番号に一致する

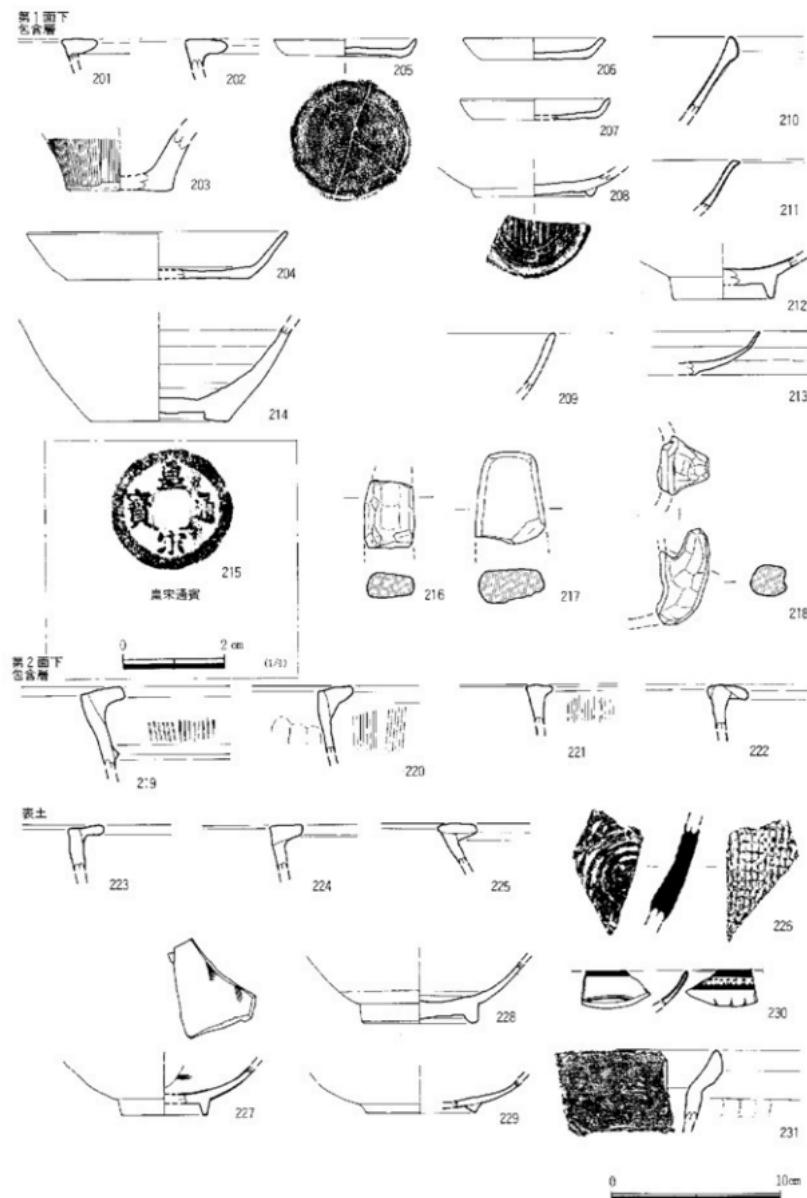


Fig.29 III区第1・2面下包含層、表土出土遺物実測図 (縮尺 1/3・1/1)

は瓦器焼である。230は明の染付皿で、外面の下位には芭蕉文を施す。231は瓦質土器の鍋である。

6. 第2地点の調査

(1) 概要

当該地は桑原飛標貝塚の南側に相当し、第1地点から道路を挟んで西側に位置する。暗渠工事が既に着工されていた。当初の環境局との協議事項にはない工事であり、地元の強い要望により実施したとの理由であった。長さ42m、最大幅7m、深さ約3mまで掘削されており、且つ、床打ち工事が完了していた。貝層はこの掘削壕の北端部において発見した。上部は既設の溜枡の掘削壕のため削平を受けている。貝層は厚さ70cm、幅60cm程度である。第1地点の貝層同様に、南側は河川の浸食のため段落ち状態になっている。上面はほぼ水平であることから、上部の削平が考えられる。貝層からの出土遺物はない。

(2) 土層

桑原地区は既に圃場整備が行われており、当該地は盛土施行により、旧耕作土の遺存層の上に厚さ130~160cmの盛土がなされている。旧耕作土の第7層上面の標高は7.7mを測り、北側は水平堆積であるが南側は河川の浸食を受けており、レンズ状堆積がみられる。第1地点II区の南側トレンチと同じ

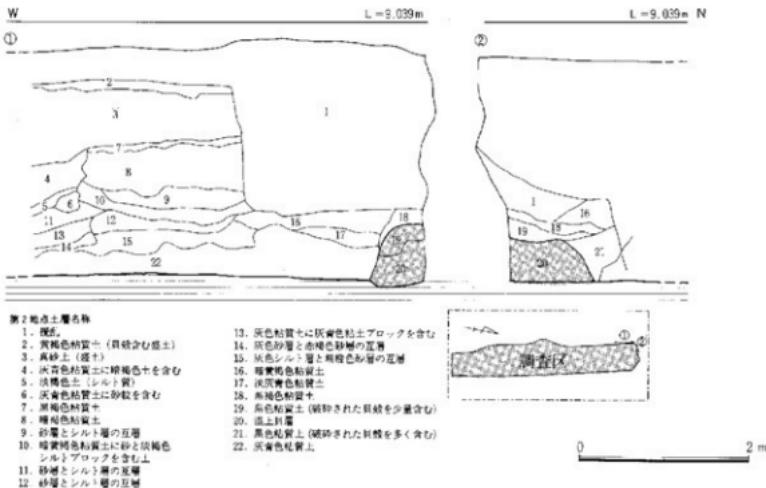


Fig. 30 第2地点上層実測図(縮尺1/60)

堆積状況を示している。第⑨～⑯層までは砂層もしくはシルト質層で形成され、第⑰・⑱層は灰黒色、又は灰青色粘質土で、ヘドロ状堆積物となっている。貝層は第⑲・⑳層で、南側は急傾斜を示しており、浸食によるものであろう。第㉑層の黒褐色土層は、第㉒層の面が水平に形成されているところから整地層と考えられる。

7. まとめ

今回の調査によって、当初、分布地図において想定していた飛櫛貝塚の検出のみならず、弥生時代から鎌倉時代までの遺構の存在を確認した成果は大きく、各時代において今津湾を中心とした交易・生業について具体的な資料を提示するものといえる。又、集落遺跡が標高4～5mの低位段丘上に立地する点も、元岡・桑原地区の遺跡の分布状況の把握や発掘調査の際の指標になるものである。貝塚の報告は次回に譲ることにしたが、今回、飛櫛貝塚の遺存範囲を大略把握できたことや、貝塚の中心が現道から西側の丘陵斜面にあることが推測できたことは大きい。又、阿高系土器や磨消し縄文土器等の出土は、これらの出土状況の分析によって貝塚の形成時期を明らかにすると共に、及び北部九州沿岸の縄文土器の型式学的編年に寄与できるものと信じる。

II区においては第1・2面下の包含層より、多量の玄武岩剝片、屑の他、石斧未製品・完成品も併せて出土した。これらの石斧の内には大型蛤刃と考えられる石斧や短骨状の扁平石斧などがある。短冊状の扁平石斧は図示したように局部磨製の石斧で、両刃・片刃の両方がある。縄文時代の石斧と考えられる。玄武岩を用いた弥生時代の石斧工房は春山遺跡や今津貝塚、長浜貝塚が前期として知られるが、この地域において縄文時代から普遍的に玄武岩を用いて作られていた可能性がある。又、石斧未製品が扁平で、短冊形であることなど、今山遺跡の玄武岩石斧の製作開始時期の課題に指標を与えている。

古墳時代の土師器には山陰系といわれる壺や瀬戸内系の器台・壺等が出土しており、又、朝鮮系の土器の出土は他地域に比べて、比較的多いことは交易の産物であり、玄界灘・今津湾を中心とした交流の特異性を示している。

東桑原遺跡道路工事の状況（南東から）



貝塚埋戻しの状態（南から）



埋戻し完了の状態（北から）



Tab. 1 桑原遺跡遺構一覧表

(単位: cm)

遺構名	組名	地 区	種類	平面形	横断形	現存長	現存幅	深	出 土 遺 物	時代	備考
SK 01	D 1	III 区	土塙	不整形	逆梯形	243	145	19	縄文土器甕、弥生土器甕、土師器蓋、須磨器環、瓦器 柄、中田白陶瓶、端石・石斧、敲打具、磨石、算盤石、 セスカイト	縄文	瘞の可能性あり。
SK 02		III 区	土塙	不整 楕円形	逆梯形	130	95	20			
SK 03		II 区	土塙	不整形	逆梯形	345	340	15			
SK 04	SP44	III 区	土塙	不整形	逆梯形	135	130	39	縄文土器、弥生土器甕、玄武岩、貝岩	中世	
SK 05	SP65	II 区	土塙	不整形	逆梯形	130	90	20	尾土器、弥生土器甕、便、土師器	古墳	
SR 01	1号	II 区	土壤 墓	隅 長方形	逆梯形	150	60	31	縄文土器甕、黑瑪瑙、人骨、貝施(クマサルボウガイ)、 ベンケイガイ、灰陶、堅骨	縄文	4号・5号人骨 出土
SR 02	2号	I 区	土壤 墓	長方形	逆梯形	175	64	19	縄文土器甕、人骨1体	縄文	境界地にある。 6号人骨
SR 03		II 区	土壤 墓	不整圓 形	—	65	40	4	人骨	縄文	境界地にある。 3号人骨
SR 04		I 区	土壤 墓	不整形	—	115	65	15	人骨	縄文	1号人骨
SR 05		I 区	土壤 墓	—	—	70	28	—	人骨	縄文	境界地にある。 2号人骨

Tab. 2 桑原遺跡住居跡一覧表

(単位: cm)

遺構名	平面形	現存長	現存幅	壁高	主柱 有無	副柱 有無	出 土 遺 物	時代	備考
SC 01	方形	316	306	—	×	×	縄文土器、弥生土器甕、甕、壺、土師器甕、壺、甕、支脚、須磨器、灰石、石斧、磨石、石器、石臼、 玄武岩削片	古墳	境界地にある
SC 02	方形	340	330	—	×	×	縄文土器甕、弥生土器甕、甕、壺、石鍬、砥石、石斧、敲打具、黑 瑪瑙石研钵、玄武岩削片、貝岩	古墳	境界地にある
SC 03	方形	212	70	—	×	×	縄文土器、弥生土器甕、甕、土師器甕、石斧、磨石、 玄武岩	古墳	SC 01に切られる
SC 04	方形	228	220	—	×	×	縄文土器、弥生土器甕、甕、土師器甕、石斧、磨石、 敲打具、玄武岩削片	古墳	境界地にある
SC 05	方形	—	—	—	—	×	縄文土器、弥生土器甕、甕、大甕、土師器甕、壺、甕、 石鍬、石斧、玄武岩削片	古墳	SC 04に切られる SK 05と同一か。

Tab. 3 桑原遺跡出土遺物一覧表

種類 番号	測定 番号	地区	出土遺構	種類	器種	口径	底径 (底面)	容積 (底面)	形態の特徴・調整・文様	施物・色調・素地等	(単位: cm)	
16	1	I	谷	淤生 土器	甕	-	-	(4.1)	逆L字形の縁部。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。施成良好。淡茶褐色。	弥生時代中期	
16	2	I	谷	織文器	盆	-	8.2	(2.9)	平底で、内外面ナテ調整。外底は灰が残る。	ねじりとした粘土。1~2mmの砂を少し含む。施成良好。茶褐色。		
16	3	I	谷	白磁	碗	-	-	(2.9)	口縁部は玉縁である。	素地は白茶色。施成やや不良。透明性。色調は淡茶色。	大宰府Ⅲ類	
16	4	I	谷	須彌器	甕	-	-	(4.5)	外底に細かい平行印き底。内面も平行印き底。	粘土に細かい砂を少し含む。施点は好。外底は黒灰褐色。内面は淡灰色。		
16	5	I	谷	新井系 土器?	甕	(長径) 3.9	(短径) 1.8	-	鉢の手とを考えられる。断面形は橢円形を呈す。	粘土に砂を含み、やや粗い。施成良好。灰色、一部茶褐色。	新井系土器	
16	6	I	谷	新井系 土器?	甕	-	-	-	把手段で、基部は太く、先端は尖り気味である。内外面ナテ調整。	粘土に大粒の砂を含む。やや粗い。施成良好。明茶褐色。	新井系土器	
16	7	I	谷	土製品	(周径) 5.7	(幅) 2.8	(厚さ) 2.1	-	方柱状を呈し、断面形は隅丸方形である。	粘土に砂を多く含む。施成やや粗。淡茶色。	製鉄遺物?	
16	8	I	谷	土製品	(周径) 7.1	(幅) 3.1	(厚さ) 2.9	-	方柱状を呈し、断面形は隅丸方形である。	粘土に砂を多く含む。施成やや粗。淡茶褐色。	製鉄遺物	
17	10	I	I面下 包合層	土器器	皿	8.6	7.6	1.2	系切り底で、板目模がある。	粘土に精細。施成良好。明茶色。		
17	11	I	I面下 包合層	土器器	皿	9.4	7.3	1.2	系切り底で、板目模がある。	粘土に1mm前後の砂を多く含む。裏は含む。施成良好。淡茶褐色。	完形品	
17	12	I	I面下 包合層	土器器	高台付 皿	9.9	(7.3)	1.8	系切り底で、高台を有する。	1~2mmの砂を多く含む。施成やや粗。淡茶褐色。		
17	13	I	I面下 包合層	土器器	皿	10.2	8.2	1.4	系切り底である。	粘土に精細。施成良好。灰色~濃茶色。		
17	14	I	I面下 包合層	土器器	坏	15.5	10.6	3.3	系切り底で、板目模がある。内底は湯呑状を呈する。	1mm前後の砂を少し含む。施成良好。淡茶褐色。		
17	15	I	I面下 包合層	土器器	坏	15.1	11.5	2.8	系切り底で、板目模がある。	粘土に精細。施成やや粗。褐色。		
17	16	I	I面下 包合層	瓦器	桶	-	(6.2)	(2.6)	高台は小さく低い。外面はヘラミガキを施す。	1~2mmの砂粒を含む。施成良好。灰色~墨灰褐色。		
17	17	I	I面下 包合層	瓦器	桶	17.0	(5.3)	5.05	高台は低く、断面形は三角形を呈する。内面は外縁ともヘラミガキを施す。	粘土に精緻。施成良好。墨灰褐色。		
17	18	I	I面下 包合層	白磁	碗	16.8	-	(4.9)	口縁部は小さく外反する。脚は外面下位まで施す。	素地は白灰色。透明性は厚目。色調は白灰色。施成良好。	大宰府Ⅱ ~Ⅳ類	
17	19	I	I面下 包合層	白磁	碗	-	-	(3.8)	口縁部に施した形を呈する。脚は外側に中位まで施す。	素地は白灰色。透明性。施成良好。	大宰府Ⅳ類	
17	20	I	I面下 包合層	白磁	碗	-	-	(3.9)	玉縁口縁部である。脚は外側に上位まで施す。	素地は淡茶色。透明性は厚目。施成良好。	大宰府Ⅳ類	
17	21	I	I面下 包合層	白磁	碗	15.4	-	(5.2)	口縁部は6ヶ所の輪花をもち、内面に白釉を施す。	素地は淡茶色。透明性は厚目。色調は白灰色。施成良好。	龍泉窯系Ⅰ 類	
17	22	I	I面下 包合層	青磁	碗	15.6	-	(5.6)	外縁に唐絵文、内底にへら彫りの直文と、描眉文を施す。	素地は淡茶色。透明性。色調は淡茶色。施成良好。	同安窯系Ⅲ類	
17	23	I	I面下 包合層	陶器	壺	-	8.4	(3.5)	耳をもつ2脚の底部で、筋節底法である。	素地は淡茶色で、色調は茶褐色。施成良好。	中国製	
17	24	I	I面下 包合層	白磁	碗	-	(6.4)	(2.6)	高い高台をもつ白磁碗である。脚は一部に付までかかる。脚は高台外側まで施す。	素地は淡灰色。透明性の半透明性。色調は乳白色。施成良好。	大宰府Ⅳ ~Ⅴ類	
17	25	I	I面下 包合層	青磁	碗	-	(5.0)	(2.5)	内底見込みに沈線をもつ、高台は低い。脚は厚目で、外側下位まで施す。	素地は淡茶色で轉錐形。脚は砂をわずかに含む。透明性。色調は乳白色。施成良好。	同安窯系Ⅳ 類	
17	26	I	I面下 包合層	青磁	碗	-	(5.2)	(1.7)	外底の辺りが浅い、低い高台である。脚は外底部まで施す。	素地は淡茶色。脚は薄茶色を帯びた半透明性。色調は淡茶色。施成良好。	龍泉窯系Ⅰ 類	
17	27	I	I面下 包合層	白磁	皿	-	5.0	(1.2)	内底にへら彫りの直文又は花文を施す。外縁部露胎。	素地は淡灰色でやや粗い。透明性。色調は白灰色。施成良好。	大宰府Ⅳ ~Ⅴ類	
17	28	I	I面下 包合層	白磁	皿	10.2	4.2	2.0	縁がやや壊れる。内底にへら彫りの直文又は花文を施す。外縁部のみ露胎。	素地は淡灰色。透明性。色調は白灰色。施成良好。	大宰府Ⅳ ~Ⅴ類	
17	29	I	I面下 包合層	白磁	高台付 皿	9.1	(4.1)	2.3	内底に沈線に沈痕がある。脚は外側の中程まで施す。	素地は淡茶色。白灰色。施成良好。	龍泉窯系Ⅳ 類	

Tab. 3 桑原遺跡出土遺物一覧表

(単位: cm)

地区 番号	地名	出土遺物	種類	器種	寸 径	高 度 (直立部)	器 高 (現存部)	形態の特徴・調査・文様	地物・色調・黒地等	備考
17 32	I 2 口下 包合層	須恵器	杯	-	(8.9) (1.4)	細い縁合は、外底部の内裏に附け る。	粘土は砂を含むが緻密。焼成 火の吹き。透明白色。	8世紀		
17 33	I 2 口下 包合層	青 磁	皿	-	3.8 (0.9)	内面ヘラ形の笠文を施す。外底部 露出し。	素地は白灰色。透明釉。瓶底 良好。	須瓦窯系 大谷窑體 -1類	同安窯系	
17 34	I 2 口下 包合層	青 磁	皿	-	- (2.5)	口縁部は内側するが、見込みに花邊 1条。内底に模様文がある。種は外 面に位まで施す。	素地は内灰褐色で特徴。筒才 リ・ア色調。焼成良好。	同安窯系	類	
18 38	I S P 108	土師器	皿	8.7	6.2	1.1	朱切り底。	粘土に大粒の砂を含み、やや 粗い。焼成良好。淡茶褐色。	完形品	
18 39	I S P 54	土師器	皿	8.6	6.2	1.3	朱切り底で、外底に板目底がある。	粘土に砂を少し含み、難觀。 焼成良好。墨色。		
18 40	I S P 111	土師器	皿	9.2	7.2	1.3	朱切り底で、外底に板目底がある。	粘土は精緻。焼成良好。淡茶 色。		
18 41	I S P 62	瓦 瓷	皿	9.0	7.0	0.9	朱切り底。	粘土は精緻。焼成良好。灰色。		
18 42	I S P 111	瓦 瓷	碗	14.3 (5.2)	4.4	低い高台は断面が三角形を呈し、 内面のヘラ形が引き出字。口唇部に 模様がある。	粘土に砂を少し含み、難觀。 焼成良好。灰色。	捕窯型		
18 43	I S P 51	瓦 瓷	碗	16.0	-	(5.0)	口径が大きく、内部は丸みをもつ。 内外面には細いミガキを施す。	粘土は精緻。焼成良好。淡白 褐色。		
18 44	I S P 48	口 瓢	皿	9.8	4.4	2.3	内底部にヘラ形の笠文を施す。外底 部に垂壺あり。外底部は露胎。	素地は白灰色で精緻。透明釉。 焼成良好。	大谷窑體 -1類 墨色	
18 45	I S P 39	口 瓢	皿	-	4.9	1.3	内底部に模様文を施す。外底部露胎。	素地は灰白色で精緻。オリーブ 色釉は2段目。焼成良好。	同安窯系 I類	
18 46	I S P 101	青 磁	皿	-	5.4 (1.5)	-	内底部に模様文を施す。外底部露胎。	素地は灰三色で精緻。オリーブ 色釉は墨色。焼成良好。	同安窯系 I類	
18 47	I S P 62	青 磁	碗	-	- (2.7)	-	口底部は外反し、外底に粗且の溝用 目を施す。	素地は灰白色で、難觀。色調は オリーブ色。焼成良好。	同安窯系 青	
18 48	I S P 107	青 磁	碗	-	- (2.3)	-	蓮子碗の口縁部で、外側に荷葉文を 施す。	素地は灰白色で、難觀。オリーブ 色を施した透明釉。焼成良好。	同安窯系 青	
18 49	I S P 111	青 磁	碗	16.1	4.9	6.8	内面にはヘラ形の笠文と模様文を、 外側には模様文を施す。蓮子碗で ある。	素地は灰白色。オリーブ色を施 した透明釉。焼成良好。	同安窯系 青	
18 50	I S P 118	白 瓷	碗	14.0	4.9	4.5	表面は灰、口底部は銀く外反する。 高台は細く、口底部は銀く外反する。 ある。輪郭は外底下位まで施す。	素地は白灰色で精緻。透明釉。 焼成良好。	大谷窑體 IV類	
18 51	I S P 39	口 瓢	碗	-	- (2.9)	-	三輪口縁部である。	素地は灰白色で噴釉。焼成良好。		
18 52	I S P 124	陶 器	盤	-	- (5.3)	-	口縁部内面に2条の三角尖耳を有す る。	素地は太灰の砂を多く含み、 粗い。茶色。焼成良好。	中国製	
18 53	I S P 40	土師質 土	盤	-	- (4.3)	-	口縁部は逆し字形を呈する。内外同 ヨコナナメ割。	粘土に大粒の砂を多く含み、 粗い。暗茶灰色。焼成良好。		
19 54	II S C 01	土師器	蓋	-	- (9.5)	-	口縁部は銀く外反する。体部内面は ヨコ方向のヘラケズリ模様。	粘土に砂を多量に含み、や や粗い。焼成やや良。淡茶褐色。	外周磨滅	
19 55	II S C 01	土師器	蓋	-	- (7.4)	-	外反した口縁部は内寄する。内面は ヨコ方向のヘラケズリ模様。	粘土に1~3mmの砂粒を多く含 み。焼成火候。外側は暗茶褐色。 内面は白。	外周磨滅	
19 56	II S C 01	土師器	蓋	-	- (8.0)	-	2重口縁の蓋である。外側面ナナメ 盤。体部内面はヘラケズリ模様。	粘土に1~3mmの砂粒を少し含 み。焼成やや良。淡茶褐色。	圓周内斜か ら	
19 57	II S C 01	土師器	蓋	-	- (10.4)	-	体部は環形に開いて、前面はハテ割型、 背面は複ナナメ割である。	粘土に白~銀色を多く含む。 焼成良好。外側は暗茶褐色。		
19 58	II S C 01	土師器	高 瓶	21.0	-	(8.9)	表面が銀く、底面と体部の地は底を もつている。	内面は茶褐色。	内周磨滅 上部67と同 個体	
19 59	II S C 01	土師器	高 瓶	-	- (9.7)	-	底部で、側部との境に径1.0mmの3つ の穿孔がある。内面にしづり痕。	粘土に砂を含むが緻 かい。焼成良好。淡茶褐色。		
19 60	II S C 01	土師器	高 瓶	-	11.4 (9.7)	-	側部で、瓶部は大きく開く。底部は 膨らみをもたない。内面にナナメ割。	粘土に砂を含む。焼成良好。茶 褐色。		
19 61	II S C 01	土師器	高 瓶	6.0	10.6	10.0	上縁部の突起を欠く。内外ナナメ 割。上縁部に深1.2cmの穿孔。	粘土は細かい。焼成良好。茶 褐色。		
19 63	II S C 02	紫 生 土	器	便	-	- (4.5)	外側は逆し字形を呈し、外側は10本基 位のタテハケ網目。内面は7本半位の ヨコハケ網目。	粘土に1~2mmの砂粒を少量含 む。焼成良好。薄茶色。	弥生時代中 期	

Table. 3 桑原遺跡出土遺物一覧表

(単位: cm)

序号 番号	地名	出土遺物	種類	器種	口径	底径 (底付)	高さ (底付)	形態の特徴・調査・文様	施粧・色調・質地等	備考
19 64	II	SC 02	张生器	甕	-	7.8	(5.3)	底部で、内面はナデ調整。	粘土に1~3mmの砂粒を多く含む。焼成良好。淡明茶色。	弥生時代中期
19 65	II	SC 02	张生器	甕	-	7.0	(4.0)	底部で、外面に5本単位のテテハケ調整。	粘土に1~3mmの砂粒を含む。焼成良好。淡茶褐色。	内面素減
19 66	II	SC 02	张生器	支脚	-	7.8	(5.3)	脚部で、外面ナデ調整。	粘土に1~3mmの砂粒を含む。焼成良好。淡茶褐色。	
19 67	II	SC 02	土器	高坏	21.0	-	(8.9)	环部で、底部と体部の境は特徴的な段段を持っている。	粘土は精緻。焼成良好。茶褐色。	土器Bと同一個体
19 68	II	SC 02	土器	高坏	-	22.4	(5.9)	环部で、体部と底部との境は不明瞭。环部で、底部と体部との境はアコハケ調整。	粘土に1~3mmの砂粒を含む。焼成良好。茶褐色。	内外面素減
19 69	II	SC 02	土器	高坏	-	-	-	脚部で、底部はややふくらみを持つ。内面にはアコハケ調整。	粘土に1~2mmの砂粒を含む。焼成良好。茶褐色。	
19 70	II	SC 02	土器	高坏	17.3	-	(6.9)	底部で、底部と体部の境ははっきりしている。外面はナデ調整。内面にはナデハケ調整。	粘土に細粒を少し含む。焼成良好。茶褐色。	
20 71	II	SC 04	土器	合付脚	9.9	6.3	6.3	外面は凹き調整。内面はナデ調整。	粘土に1~2mmの砂粒を含む。焼成良好。茶褐色。	
20 72	II	SC 04	土器	脚台	-	10.1	7.4	外面は指ナデ調整。	粘土に細粒を含む。焼成良好。茶褐色。	
20 73	II	SC 04	张生器	脚台	-	13.6	(10.8)	内外面ナデ調整。	粘土に白い砂粒を多く含む。焼成良好。茶褐色。	
20 74	II	SC 04	张生器	脚台	-	12.9	(7.7)	外側は板状工具によるナデ調整。	粘土に白い砂粒を多く含む。焼成良好。茶褐色。	
21 76	II	SC 05	土器	壺	22.5	-	(27.8)	口縁部で、内面はナデハケ調整。外側は指ナデハケ調整。内面はヨコナデ調整。	粘土に細粒を含む。焼成良好。茶褐色。	
21 77	II	SC 05	土器	甕	25.1	-	(19.4)	表面削り、内面ハケ調整。ハケは12cm以上の位置である。	粘土に細粒を含む。焼成良好。茶褐色。	
21 78	II	SC 05	土器	壺	27.2	-	(16.0)	口縁部で、口縁部の内反は弱い。圓錐形の変形で、脚部をもつ。内外面ハケ調整がある。	粘土に白い砂粒を含む。焼成良好。茶褐色→暗茶褐色。	
21 79	II	SC 05	土器	甕	26.7	-	37.8	裏面形の甕で、丸底である。口縁部の変形で、脚部をもつ。内外面ハケ調整がある。	粘土に白い砂粒を多く含む。焼成良好。茶褐色。	
21 80	II	SC 05	土器	甕	19.5	-	28.0	口縁部は強く外反し、先端は尖り気味である。脚部外側は平手ハケキリ調整。内面はナデハケ調整である。底部はアコハケ調整。	粘土に白い砂粒を多く含む。焼成良好。茶褐色(ムラになってる)。	
21 81	II	SC 05	土器	甕	21.6	-	10.9	長脚形で、脚部外側に平行ハケキリ調整。内面はナデハケ調整である。底部に丸底あり。	粘土に1~5mmの砂粒を含む。焼成良好。淡茶褐色。	内面素減
21 82	II	SC 05	土器	甕	13.6	-	(12.3)	底部を尖いている。口縁部はくの字形である。脚部外側はアコハケ調整。	粘土に白い砂粒を多く含む。焼成良好。茶褐色→暗茶褐色。「ムラになっている」。	
22 83	II	SC 05	土器	脚台	19.9	14.3	14.2	丸底形を呈する。脚部は斜り、外反し、底部は丸底。脚部外側は丸底。内面に複数ある。口縁部は丸底。脚部は斜り、外反し、底部は丸底。内面に複数ある。口縁部は斜り、外反し、底部は丸底。内面に複数ある。	粘土に砂を多く含む。焼成良好。茶褐色。	脚台内系
22 84	II	SC 05	土器	高坏	-	11.6	(10.3)	脚部で、脚部は強く外反する。	粘土に白い砂粒を多く含む。焼成良好。茶褐色。	
22 85	II	SC 05	土器	高坏	-	12.2	(6.2)	脚部で、腹部は内汽泡に開く。	粘土は粘軟。焼成良好。淡褐色。	土器Bと同一個体
22 86	II	SK 05	土器	高坏	23.1	12.2	15.0	丸底の直腹形が丸底で神付。口縁部は大きく開く。内面は外気臭味に觸れる。内外面ハケ調整。内面はナデハケ調整。底部はアコハケ調整。	粘土は精緻。焼成良好。明茶褐色→灰茶色。内面に運付有。	
24 87	II	SK 05	张生器	板	-	-	(2.2)	逆L字形口沿である。	粘土は粗い。焼成良好。淡茶灰色。	山陰系の板といわれる
24 88	II	SK 05	张生器	甕	-	-	(2.7)	逆L字形口沿である。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。焼成良好。茶褐色。	
24 89	II	SK 05	张生器	甕	-	-	(2.0)	逆L字形口縁部である。	粘土に1~4mmの砂を多く含む。焼成良好。茶褐色。	弥生時代中期
24 90	II	SK 05	张生器	甕	-	-	(2.2)	逆L字形口縁部である。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。焼成良好。茶褐色。	弥生時代中期
24 91	II	SK 05	张生器	甕	-	-	(5.2)	逆L字形口縁部で、内面にも軽やかに運付行地厚をせる。外面に黒斑が見られる。	粘土に軽やかに砂を含む。焼成良好。茶褐色。	弥生時代中期
24 92	II	SK 05	张生器	高坏	-	-	(2.1)	杯盤口縁部で、内面に運付行地厚をせる。外面に黒斑が見られる。	粘土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。茶褐色。	弥生時代中期
24 93	II	SP 5	张生器	甕	-	-	(3.0)	逆L字形口縁部である。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。焼成良好。茶褐色。	弥生時代中期

Tab. 3 桑原遺跡出土遺物一覧表

(単位: cm)

辨別 番号	地名 番号	地区	出土場所	種類	器種	口 幅	底 径 (底径)	高 (高さ)	形態の特徴・調査・文様	地相・色調・質地等	備考	
24	94	II	S P 3 3	赤土 器	壺	-	-	(2.0)	側面形に開く。口縁部の内面を厚厚させ、平坦部を形成する。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。焼成良好。明茶色。	弥生時代中期	
24	95	II	S K 0 5	赤土 器	壺	-	-	(5.9)	平底で、底部は鉢形に開く。	粘土上に1cm前後の砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。	弥生時代中期	
24	96	II	S P 6 4	赤土 器	壺	-	8.0	(11.5)	上げ底の底面は厚く、外表面はテハケ状の凹凸がある。内面には1本の溝がある。外側には朱漆による調整。内外面に経縫を施す。	粘土に1~2mmの砂を多く含み、粗い。焼成やや軟。外表面は淡茶褐色。内面は淡黄褐色。		
24	101	II	1 面下 包合層	赤土 器	壺	-	-	(6.1)	口縁部に2条、内面に1条の溝がある。外側には朱漆による調整。	粘土に砂を殆ど含まない。焼成良好。深褐色。		
24	102	II	1 面下 包合層	赤土 器	壺	-	-	(4.8)	洗浄による表面剥離。外表面に難波が見られる。	粘土に砂を殆ど含まない。焼成良好。淡茶褐色。		
24	103	II	1 面下 包合層	赤土 器	壺	-	-	(4.4)	口縁部に内外両面に凹凸がある。外側の突起部に斜めに1列目を施す。内外側は朱漆による調整。	粘土に砂を殆ど含まない。焼成やや軟。茶褐色。		
24	104	II	1 面下 包合層	赤土 器	壺	-	-	(3.2)	内外面ナナフリ調整。外側に沈線の文様を施す。	粘土に1~2mmの砂を含む。焼成やや不良。外表面は淡褐色。内面は赤色~茶褐色。		
24	105	II	1 面下 包合層	赤土 器	壺	-	-	7.0	(4.6)	平底で、底部の立ち上がりは強い。	粘土に人粒の砂を多量に含み、粗い。焼成良好。赤褐色。	
24	106	II	1 面下 包合層	赤土 器	壺	-	-	(12.5)	如意形の口縁部である。	粘土に人粒の砂を多量に含み、粗い。焼成良好。外表面は淡茶色。内面は赤色。		
24	107	II	1 面下 包合層	土師器	壺	9.2	6.0	1.4	ヘラ切り底である。	粘土は精緻。焼成良好。淡茶色。		
24	108	II	1 面下 包合層	白土	碗	-	-	(3.2)	玉縁の口縁部。細は外表面中盤まで施す。	粘土は白灰色で精緻。透明性は厚目。焼成良好。	人字帯IV期	
24	109	II	1 面下 包合層	陶器	碗	-	10.0	2.9	平底で、底部は丸味をもつ。外表面に黄茶色の有光物。	粘土は成色で焼成。焼成良好。色調は茶色~暗茶色。		
25	110	II	2 面下 包合層	赤土 器	鉢	-	-	(4.8)	口部に棒状工具による波状口縁を施す。	粘土に1cm前後の砂を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。		
25	111	II	2 面下 包合層	赤土 器	鉢	-	-	(3.0)	口縁部に棒状工具による波状口縁を施す。内外側ナナフリ調整。	粘土に1~2mmの砂粒を含む。焼成良好。茶褐色。		
25	112	II	2 面下 包合層	赤土 器	鉢	-	-	(6.6)	外面に凹線文を施す。内面はナナフリ調整。	粘土に滑石粉末を含む。焼成良好。明茶褐色。		
25	113	II	2 面下 包合層	赤土 器	鉢	-	-	-	口部をなく。体部の突起部に斜めに刃目を施す。内外面ハケ調整。	粘土に1~2mm前後の砂粒を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。		
25	114	II	2 面下 包合層	赤土 器	鉢	-	-	(2.9)	口縁部に棒状工具による刃目を施す。内外面ナナフリ調整。	粘土に1~2mmの砂粒を含む。焼成良好。茶褐色。		
25	115	II	2 面下 包合層	赤土 器	鉢	-	-	(3.5)	外面に凹線文を施す。内面は条直調査。	粘土に1~2mmの砂粒を含む。焼成良好。茶褐色。		
25	116	II	2 面下 包合層	赤土 器	鉢	-	-	(4.5)	外面に凹線文を施す。内面はナナフリ調整。	粘土に1~2mmの砂粒を含む。焼成良好。外表面は明茶色。内面は淡茶色。		
25	117	II	2 面下 包合層	赤土 器	鉢	-	-	-	外面に沈線文を施し、内面に余挽による調整。	粘土に1~2mmの砂粒を多く含む。焼成良好。明茶色。		
25	118	II	2 面下 包合層	赤土 器	鉢	-	-	-	外面に墨線文を施す。内面はナナフリ調整である。	滑石式 鉢文後期		
25	119	II	2 面下 包合層	赤土 器	鉢	-	-	-	外面に凹線文を施す。内面はナナフリ調整。	粘土に1~2mmの砂粒を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。		
25	120	II	2 面下 包合層	赤土 器	鉢	-	-	-	外面に凹線文を施す。内面はナナフリ調整。	粘土に滑石粉末を含む。焼成良好。茶褐色。	河内式 鉢文中期	
25	121	II	2 面下 包合層	赤土 器	鉢	-	-	-	外面に凹線文を施す。内面はナナフリ調整。	粘土に1~2mmの砂粒を含む。焼成良好。茶褐色。		
25	122	II	2 面下 包合層	赤土 器	鉢	-	9.6	(3.1)	底部は平底である。外表面に指揮圧痕が残る。	粘土に滑石粉末を含む。焼成良好。茶褐色。	内外压痕滅	
25	123	II	2 面下 包合層	赤土 器	鉢	-	5.9	(2.4)	平底で、内外面に指揮圧痕が残る。	粘土に人粒の砂粒を含み、粗い。焼成良好。茶褐色。		
25	124	II	2 面下 包合層	赤土 器	鉢	-	-	(4.2)	大型平底で、口縁部を肥厚させる。口縁部に刃目を施す。	粘土に人粒の砂粒を含み、粗い。外表面は淡茶色。内面は淡茶色。		
25	125	II	2 面下 包合層	赤土 器	鉢	-	3.6	(1.4)	平底を呈する。底部外周下辺は削り調整し、内外面ナナフリ調整。	粘土に人粒の砂粒を含む。焼成良好。外表面は赤褐色。内面は褐色~黒色。		

Tab. 3 桑原遺跡出土遺物一覧表

登録番号	地区	出土遺物	種類	器種	口径	底径(底盤)	器高(底盤)	形態の特徴・測定・文様	(単位: cm)		備考	
									底盤	蓋		
25	126	II	2面下包	張生器	9	-	(7.0)	口縁部外側を厚ささせ、三角形状を呈する。内面はナナド調整。	底土に3~4mmの砂粒を多く含み、堆積良好。外表面は淡茶色。	外表面調		
25	127	II	2面下包	張生器	9	-	(4.6)	口縁部外側を厚ささせる。口縁下位に二重突起部をもつ。外底はタガハケ調整。内面は指痕底。	底土に大粒の砂を含み、やや粗い。外表面は灰茶色、内面は淡茶色。	弥生時代中期		
25	128	II	2面下包	張生器	9	-	2.1	(6.0)	上口底の底部で、体盤が丸味をもつ。外底部下位に指痕。内面はナナド調整。	底土に砂粒が多く含む。堆積良好。茶褐色。	弥生時代前期	外表面調
25	129	II	2面下包	張生器	9	-	4.7	(5.8)	上げ底の底部で、本部は丸味をもつ。外表面は崩壊か? 内面にはナナド調整。	底土に白い砂れを少し含む。堆積良好。灰茶色。	弥生時代初期	
25	130	II	2面下包	張生器	9	25.2	-	(13.4)	口縁部は強く崩壊し、内面に強い段差をもつ。外底に1本単位のタガハケ調整を施す。内面はナナド調整。	底土に大粒の砂粒を含み、やや粗い。外表面は灰茶色、内面は明茶色。	弥生時代中期	
25	131	II	2面下包	張生器	9	-	6.4	(5.1)	上口底の厚い底部である。体部下位に指痕底がある。コゲ茶色の付着物が多い。内外表面渦。	底土に4mmの大粒の砂粒を多く含み、粗い。堆積良好。外表面は淡茶色、内面は淡茶色。	弥生時代中期	
25	132	II	1面下包	張生器	9	-	11.0	(4.8)	やや上げ底の底部で、器壁に厚い段差をもつ。内面にはナナド調整。	底土に白い砂れを含む。堆積良好。外表面は茶褐色、内面は黒褐色。	内外表面調	
25	133	II	2面下包	張生器	9	-	7.1	(6.8)	上げ底の厚い底部である。外表面は6本単位のタガハケ調整を施す。	底土に白い砂れを含む。堆積良好。外表面は茶褐色、内面は暗褐色。	内外表面調	
26	134	II	2面下包	土器	鉢	12.4	-	5.5	体部は半球底を呈し、外底には9本以上の単位でタガハケ調整を行なう。	底土に1~5mmの砂粒を含む。堆積良好。外表面は黒褐色、内面は茶褐色。		
26	135	II	2面下包	土器	鉢	12.6	-	5.6	体部は半球体を呈し、内面にはナナド調整を施す。	底土は粗い。堆積良好。灰茶色。	外表面調	
26	136	II	2面下包	土器	鉢	14.7	-	7.0	体部は半球体を呈し、内面には指痕底がある。	底土に細砂を含む。堆積良好。明茶褐色。		
26	137	II	2面下包	土器	鉢	16.8	-	5.6	浅く丸底で、内面上位にナナド調整を施す。	底土に砂粒をよく含む。堆積良好。茶褐色。	外表面調	
26	138	II	2面下包	土器	鉢	10.0	-	(4.9)	手捏ねで、体部は丸味をもつ。体部外側に指痕がある。内外面に指痕底がある。	底土に1~2mmの砂粒をわずかに含む。堆積良好。外表面は茶褐色、内面は暗褐色。		
26	139	II	2面下包	土器	鉢	-	-	(4.3)	口縁部はくぼみで外反す。外面部にはナナド調整。	底土に人筋の砂粒を含む。堆積良好。外表面は茶褐色、内面は茶褐色。	内面調	
26	140	II	2面下包	土器	鉢	14.5	-	(3.3)	口縁部はやや内凹気味に傾く外反する。体部内部にはナナド調整を施す。	底土に1~2mmの砂粒を含む。堆積良好。外表面は茶褐色、内面は茶褐色。	留置式	
26	141	II	2面下包	土器	鉢	15.4	-	(4.2)	口縁部は強く外反し、内面に強い段差をもつ。体部内面にはナナド調整を施す。	底土に1~2mmの砂粒を含む。堆積良好。明茶褐色。	留置式	
26	142	II	2面下包	土器	鉢	10.8	-	(5.0)	口縁部の外反は弱い。外底には13本単位のタガハケ調整がある。	底土に細砂をわずかに含む。堆積良好。明茶褐色。	内外表面調	
26	143	II	2面下包	土器	鉢	16.0	-	(6.8)	口縁部は横に外反する。体部外側には9本単位のタガハケ調整。内面にはナナド調整を施す。	底土に1~2mmの砂粒を少し含む。堆積良好。茶褐色。		
26	144	II	2面下包	土器	鉢	14.5	-	(4.8)	口縁部は強く外反する。外底にはタガハケ調整。口縁部内面には12本単位のタガハケ調整がある。	底土に1~2mmの砂粒を含む。堆積良好。明茶褐色。	外表面調	
26	145	II	2面下包	土器	鉢	10.8	-	(6.5)	口縁部は内凹気味に外反する。体部内面にはナナド調整である。内面にはナナド調整を施す。	底土に1~2mmの砂粒を少し含む。堆積良好。茶褐色。	布留式	
26	146	II	2面下包	土器	鉢	16.8	-	(5.3)	外反する口縁部に内折する。体部内面にはナナド調整を施す。	底土に細砂を多く含む。堆積良好。茶褐色。	布留式	
26	147	II	2面下包	土器	鉢	16.5	-	(4.4)	外反する口縁部に内折し、口縁部を厚ささせる。体部内面にはナナド調整。	底土に1~2mmの砂粒を多く含む。堆積良好。茶褐色。	外表面調	
26	148	II	2面下包	土器	器	音	-	(7.0)	器底は深く、底部は丸味をもつ。底部と腹部の接合部には、指痕底がある。他のタガハケ調整であるが、外底には内凹気味に開き、脚部との境に3ヶ所の穿孔がある。	底土は細かい。堆積やや軟。茶褐色。	糠戸内系	
26	149	II	2面下包	土器	高环	14.0	9.4	9.8	器底は深く、底部は丸味をもつ。底部と腹部の接合部には、指痕底がある。他のタガハケ調整であるが、外底には内凹気味に開き、脚部との境に3ヶ所の穿孔がある。	底土は細かい。堆積やや軟。茶褐色。	内面調	
26	150	II	2面下包	土器	高环	15.8	9.2	9.7	器底は深く、底部は丸味をもつ。底部と腹部の接合部には、指痕底がある。他のタガハケ調整。	底土は細かい。堆積やや軟。茶褐色。		
26	151	II	2面下包	土器	高环	17.3	-	(6.1)	器底は、口縁部は大きく開く。底部との境に強い段差をもつ。外底はヨコドリテ調整。内面はナナド調整。	底土に白い砂れを含む。堆積良好。明茶褐色。		
26	152	II	2面下包	土器	高环	19.5	-	(6.4)	器底は、口縁部は大きく開く。底部との境に強い段差をもつ。内面はナナド調整。	底土に1~2mmの砂粒を多く含む。堆積やや軟。明茶褐色。	内外表面調	
26	153	II	2面下包	土器	高环	18.4	-	(6.5)	器底は、大きく開く口縁部の底盤部を小さく外反させる。底部との境に強い段差をもつ。内面はナナド調整。	底土に白い砂れを含む。堆積良好。明茶褐色。	外表面調	

Tab. 3 桑原遺跡出土遺物一覧表

(単位: cm)

標目 番号	地区	出土遺物	種類	器種	口径	底径	深さ	高さ	形態の特徴、調整、文様	施釉、色調、素地等	備考
26	154	II 2面下包	下部器	高环	20.8	-	(5.9)		口縁部は楕円形で強く開く。底部は平底式で、全体との間に強烈な変形部がある。	粘土に1~2mmの砂粒を多く含む。施成やや軟。明茶褐色。	外表面減
27	155	II 2面下包	下部器	高环	-	10.9	(8.1)		口縁部は楕円形で、底部は直筒式。内面には砂粒が付着する。	粘土に白い砂粒を多く含む。施成良好。淡茶褐色。	
27	156	II 2面下包	下部器	高环	-	12.4	(6.4)		口縁部は楕円形で、底部は直筒式。内面には砂粒が付着する。	粘土に1mm程の砂粒を少し含む。施成良好。茶褐色~茶色。	
27	157	II 2面下包	下部器	高环	-	-	-		口縁部は楕円形で、底部は強く外反する。内面にはヘアクリスチカ。	粘土に1~2mmの砂粒を少し含む。施成良好。茶褐色。	外表面減
27	158	II 2面下包	下部器	高环	-	-	-		高い底部で、底部は最も外反し、底部との境には穿孔が付ける。内面にはナガテ調査。	粘土は構造的。施成やや軟。淡明茶色。	外表面減
27	159	II 2面下包	下部器	高环	-	14.2	(6.0)		底部で底部が最も高く立ち、外側には斜面で傾斜がある。底部には3ヶ所の穿孔がある。	粘土は細かい、施成良好。茶褐色。	
27	160	II 2面下包	下部器	合付鉢	-	8.6	(4.9)		鉢の口部である。内面には6本稜柱のヨコハラ、外側にはタケナベ調整を施す。	粘土に1~2mmの砂粒を含む。施成やや軟。茶褐色。	外表面減
27	161	II 2面下包	瓦器	皿	9.0	6.6	1.7		外側にはヨコ・ナナメ方向の擦き。内面にはヨコナベ調整。	粘土は細かい、施成良好。灰色。	
27	162	II 2面下包	土器器	皿	-	-	(0.9)		ヘアクリスチカである。内外面ナガテ調査。	粘土は特徴的。施成良好。明茶褐色。	外表面増減
27	163	II 2面下包	瓦器	柄	14.8	-	(3.4)		体部の上部にわざかに凹痕をもつ。口部部に直線を施す。外側にヨコ方向の擦き。	粘土はやや細かい。施成良好。灰色。	構造型 内表面減
27	164	II 2面下包	瓦器	柄	-	6.1	(1.8)		高台は断面三角形状で、外に強く張る。内外面にはヘアクリスチカ。	粘土に砂粒を含み、やや細かい。施成良好。灰色。	構造型 内外面増減
27	165	II 2面下包	白磁	碗	15.8	-	(4.2)		小さな玉ねり口縁を形成し、体部は丸味をもつ。手の作りである。底は外側下部で擦す。	素地は白磁で白色。透明性がかかる。施成良好。	中国南宋 大宋府Ⅰ類
27	166	II 2面下包	白磁	碗	-	-	(2.4)		玉ねり口縁の碗である。	素地は白磁で白色。厚目の透明性がかかる。施成良好。	人字序Ⅳ類
27	167	II 2面下包	白磁	碗	-	-	(2.5)		蓮子口で、縁部は尖がり気味である。	素地は白磁で白色。透明性がかかる。施成良好。	大宋府Ⅳ類
27	168	II 2面下包	須恵器	碟	-	-	-		外側は蓮子口で、西側はタケナベをナゲ消している。	粘土は特徴的。施成良好。灰色。	
27	169	II 2面下包	須恵器	碟	-	-	-		外側は粗い平行状帯を有する。内面にはナガテ調査。一部緑色の自然釉付帯。	粘土に粗い砂を含み、構造的。施成良好。灰色。	
27	170	II 2面下包	須恵器	碟	-	-	-		外側は細かいVの平行状帯を有する。内側ナガテ調査。	粘土に砂粒を少量含み、やや細かい。施成良好。灰色。	
27	171	II 2面下包	土製品	环	2.0	-	1.5		丸窓の内で、外側面ナガテ調査。横腹圧痕がある。	粘土に1mm前後の砂を少し含む。施成良好。灰色。	ミニチュア 土器
27	172	II 2面下包	土製品	高环	2.2	1.5	3.1		底部は半球形である。外側は丸輪をもち、内外面ナガテ調査。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。施成やや軟。淡茶色。	ミニチュア 土器
27	173	II 2面下包	土製品	钵	7.0	-	(2.5)		底部は丸輪をもち、内側部はやや外反する。内外面ナガテ調査。	粘土は構造的。施成良好。明茶褐色。	ミニチュア 土器
27	174	II 2面下包	土製品	不明(唐木)	1.2	1.6	4.4		盤面形は円形で、椭円形を呈する。下部は次いでいる。ナガテ調査。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。施成良好。淡茶色。	
27	175	II 2面下包	土製品	玉	(唐木)	(厚さ) 2.0	(長さ) 1.45	(1.5)	椭円形を呈している。ナガテ調査。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。施成良好。茶褐色。	
27	176	II 2面下包	土製品	粘鑑車	(唐木)	(厚さ) 6.6	(長さ) 2.4	(6.8)	器壁は厚い。半身に前方から穿孔しており、後6.6mmを有する。表面はナガテ調査。	粘土に1~3mmの砂を含む。施成やや軟。淡茶褐色。	
28	177	III SK01	生土	甕	22	6	-	(5.5)	透し字形の縁部で、内外面に刻目を施す。内側部はナガテ調査。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。施成良好。淡茶褐色。	弥生時代中期
28	178	III SK01	生土	甕	-	-	(2.9)		透し字形の縁部で、内外面に刻目を施す。内外面ナガテ調査。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。施成良好。淡茶褐色。	弥生時代中期
28	179	III SK01	生土	甕	-	-	(2.3)		透し字形の縁部で、内外面に刻目を施す。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。施成良好。淡茶褐色。	弥生時代中期
28	180	III SK01	生土	甕	-	-	(2.7)		透し字形の縁部で、内外面に刻目を施す。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。施成良好。淡茶褐色。	弥生時代中期
28	181	III SK01	生土	甕	-	-	(2.4)		内縁部は三角形の貼付窓を有し、外縁部はハサギ8本単位のタケナベ調査である。	粘土に1~3mmの砂を多く含む。施成良好。外縁部は褐色。	

Tab. 3 桑原遺跡出土遺物一覧表

(単位: cm)

発掘 場所 番号	地区	出土遺構	種類	器種	口幅	底径 (底面)	器高 (現存)	形態の特徴・説明・文様	施釉・色調・集地等	備考	
28	182	III	SK01	先生器	束	-	-	(2.1) 逆L字形口縁部である。	粘土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。		
28	183	III	SK01	白磁	碗	15.1	-	(3.4) 太い平縁に縁部である。縁は外延上位で施す。	素地は灰色。色調を帯びた透明釉。色調は淡緑灰色。焼成良好。	大宰府IV期	
28	184	III	SK01	瓦器	碗	16.1	(6.7)	(4.6) 瓦器が低い。表面は割れ目が很多。内面に反し縁がある。内面にはクヌケ状。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。灰色。		
28	185	III	SK01	瓦器	皿	9.2	-	(1.6) 底部は余切りで、歪みがある。底部との境は強い波折もつ。	粘土は精緻。焼成良好。外面は焼成色。内面は灰褐色。		
28	186	III	SK01	土師器	皿	7.9	-	(1.1) 糸切り底で、板状底がある。	粘土は精緻。焼成良好。明茶褐色。		
28	187	III	SK01	土師器	皿	8.6	6.2	1.03	糸切り底で、板状底がある。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。	
28	193	III	SP44	先生 土器	盃	-	8.2	(4.3)	平底で、底部は外青筋突起に立ち上がる。内外面ナナ子調整。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成やや良。明茶褐色。	先生時代中期
28	194	III	SP 6	土師器	皿	9.0	7.2	0.9	糸切り底で、内外面ナナ子調整。	粘土は精緻。焼成良好。淡茶褐色。	
28	195	III	SP 6	土師器	皿	10.0	8.0	(0.8)	糸切り底で、内外面ナナ子調整。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。	
28	196	III	SP 20	土師器	皿	9.0	1.5	(1.2)	糸切り底で、内外面ナナ子調整。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	
28	197	III	SP 3	白磁	皿	10.0	-	-	口縁部内面に1条の沈擦。外側上位まで施す。	素地は白灰色。透明釉。焼成良好。	大宰府Ⅳ期
28	198	III	SP 37	青磁	皿	-	-	(1.0)	内面に模様文を施す。外底部は落款。	素地は精緻。縁はオリーブ色。透明釉。色調は青白色。	同安窯系I期
28	199	III	SP 34	白磁	瓶	-	-	(2.8)	玉縁の口縁部。	素地は白灰色。透明釉は厚目。焼成良好。	大宰府Ⅳ期
28	200	III	SP 6	青磁	碗	16.7	5.2	7.0	内面はヘラ彫りの雲文と猫足文も。外側は都日文を施す。高台外底部の削りは深い。底台、外底部は落款。	素地は灰白色で精緻。オリーブ色がかった透明釉。焼成良好。	同安窯系Ⅲ期
29	201	III	1面下 包合 器	先生 土器	束	-	-	(1.7)	逆L字形口縁部。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。	先生時代中期
29	202	III	1面下 包合 器	先生 土器	束	-	-	(2.0)	逆L字形口縁部。	粘土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。	先生時代中期
29	203	III	1面下 包合 器	先生 土器	卷	-	6.4	(3.7)	平底で、外側は8本単位のクサベキ。内面はナナ子調である。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。焼成良好。外側は明茶褐色。内面は淡茶褐色。	
29	204	III	1面下 包合 器	土師器	环	15.4	10.9	3.8	糸切り底で、板状底がある。内側面コナテ調整。	粘土に細かい砂と金色の粒を含み。精緻。焼成良好。明茶褐色。	
29	206	III	1面下 包合 器	土師器	环	8.4	6.8	1.0	糸切り底で、内外面コナテ調整。	粘土に細かい砂と金色の粒を含み。精緻。焼成良好。明茶褐色。	ほけ井形
29	206	III	1面下 包合 器	土師器	皿	8.2	6.3	1.3	糸切り底で、内外面コナテ調整。	粘土に細かい砂と金色の粒を含み。精緻。焼成良好。明茶褐色。	
29	207	III	1面下 包合 器	土師器	皿	9.0	3.7	(1.2)	糸切り底で、内外面コナテ調整。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。茶褐色。	
29	208	III	1面下 包合 器	瓦器	碗	-	(7.0)	(1.4)	底部片て、高台断面形は三角形状を呈す。内面はヘラ彫きを施す。	粘土は白灰色で精緻。焼成良好。外側は白灰色。内面は黒目。	
29	209	III	1面下 包合 器	瓦器	碗	-	-	(3.5)	口縁部は丸味をもつ。内外面粗いヘラ彫きを施す。	粘土に白灰色の砂を少し含み、やや粗い。焼成良好。外側は焼成色。内面は白灰色。	
29	210	III	1面下 包合 器	白磁	碗	-	-	(4.7)	玉縁に縁部片である。縁は毎目で、椎輪文がかかる。	素地は白灰色で精緻。透明釉は厚目。焼成良好。	大宰府IV期
29	211	III	1面下 包合 器	白磁	碗	-	-	(3.0)	口縁部が削りを呈する。	素地は白灰色で精緻。透明釉は厚目。焼成良好。	大宰府V期
29	212	III	1面下 包合 器	白磁	碗	-	(6.0)	(2.5)	高台は高く高い。内面の縁は厚目で、外側は直腹である。	素地は白灰色で精緻。透明釉。焼成良好。	大宰府V期
29	213	III	1面下 包合 器	白磁	皿	-	-	(2.6)	薄手で、口縁部は折折する。	素地は白灰色で精緻。焼成良好。	中国白磁 大宰府V期

Tab. 3 桑原遺跡出土遺物一覧表

標名 番号	遺物 名	地区	出土遺構	種類	器種	口径	高さ (基部)	器高 (現在)	形態的特徴・調査・文様	施釉・色調・質地等	(単位: cm)		
29 214	1面下包含層	III	ト デ 耳 器	素	壺	—	(8.1)	(5.8)	瓶部は丸底をもち、外底部は高脚状をなす。	本体は焼成。焼成良好。外面部は灰褐色。内面部は灰白色。底部は深灰色。			
29 216	1面下包含層	III	土製品	不 明	便器	4.0	(便器)	(幅) 3.0	(厚さ) 1~1.5	断面形が不整椭円形を呈し、上、下を全くナテ調整。製鉄関連の遺物か?	胎土に砂を含み、やや粗い。焼成良好。明茶色。		
29 217	1面下包含層	III	土製品	不 明	便器	5.5	(便器)	(幅) 4.2	(厚さ) 2.6	断面形が不整椭円形を呈し、先端部は丸底をもち、下部は次第して狭くなる。製鉄関連の遺物か?	胎土に1~2mmの砂と薄茶色の粒を含む。焼成やや軟。淡茶色。		
29 218	1面下包含層	III	土製品	物形	壺	—	—	—	丸子形土壺の把手である。把手先端が尖り、丸子にかけて強い角度で斜付けている。	胎土に細かい砂を含み、やや粗い。焼成良好。深茶色。	新鮮系土器か?		
29 219	2面下包含層	III	泥 生 器	素	壺	—	—	(4.8)	延L字形の口縁部で、口縁部直下に小さな二重突唇がある。外面には6本単位のタブハケ調査。	胎土に1~2mmの砂を多く含む。7mm前後の砂を含む。焼成良好。外面部は明茶褐色。内面部は明茶色。	弥生時代中期		
29 220	2面下包含層	III	泥 生 器	素	壺	—	—	(4.2)	延L字形の口縁部で、外面は8本単位のタブハケ調査。	胎土に1~3mmの砂を多く含む。焼成良好。淡褐色。	弥生時代中期		
29 221	2面下包含層	III	泥 生 器	素	壺	—	—	(2.5)	三尖突唇の付いた口縁部である。外面は7本単位のタブハケ調査。	胎土に1~2mmの砂を多く含む。7mm前後の砂を含む。焼成良好。茶色。	弥生時代中期		
29 222	2面下包含層	III	泥 生 器	素	壺	—	—	(2.7)	延L字形の口縁部で内面を更厚さとする。外面は6本単位のタブハケ調査。	胎土に1~2mmの砂を多く含む。焼成やや軟。淡茶色。	弥生時代中期		
29 223	表 土 弥 生 器	—	—	—	壺	—	—	(3.0)	延L字形の口縁部。	胎土に1~2mmの砂を多く含む。焼成やや軟。淡茶色。	弥生時代中期		
29 224	表 土 弥 生 器	—	—	—	壺	—	—	(2.7)	延L字形の口縁部。	胎土に1~2mmの砂を多く含む。焼成やや軟。淡茶色。	弥生時代中期		
29 225	表 土 弥 生 器	—	—	—	壺	—	—	(2.5)	延L字形の口縁部で、内傾する。	胎土に1~2mmの砂を多く含む。焼成良好。茶褐色。	弥生時代中期		
29 226	表 土 順應器	—	—	—	壺	—	—	(5.9)	外面は梢子目開き、内面は同心円の立て具模がある。	胎土は粗緻。焼成良好。青灰色。			
29 227	表 土 白 磁	—	—	—	壺	—	(5.1)	(3.0)	白磁は軽く高い。内面に櫛目文を施す。輪は外側下位まで施す。	施釉は白灰色で透明。透明釉。焼成良好。	大宰府V期		
29 228	表 上 白 磁	—	—	—	壺	—	(6.3)	(3.7)	高台外側の削りは浅い。輪は外側下位まで施す。内面突込みに旋がる。	施釉は茶褐色で透明。透明釉。焼成やや軟。	大宰府V期		
29 229	表 土 五 端	—	—	—	壺	—	(6.4)	(2.0)	高台の断面形は三角形を呈する。内面はヘリカギを施す。	胎土に砂を殆ど含まない。焼成良好。灰褐色。	唐城		
29 230	表 土 磁付	—	—	—	壺	—	—	—	口縁部は内寫眞文で長横で文様を描く。外側に芭蕉文を施す。	施釉は白色で、やや粗い。透明釉。焼成やや軟。焼成良好。	明治化		
29 231	表 土 瓦質	—	—	—	壺	—	—	(4.2)	口縁部は内寫眞文で長横で文様を描く。外側を肥厚させる。内面はヨコハケ調査。	胎土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。外面部は黒褐色。内面部は白灰色。			

Tab. 4 桑原遺跡出土金屬製品一覧表

(単位: cm)

地図 番号	遺物 番号	地区	出 土 標 標	種 類	器 種	長(現存長)	幅(現存幅)	厚(現存厚)	特 性
17	35	I 区	2 面下包含層	鉄製品	刀 子	—	—	0.2~0.4	万葉りが短い工具と考えられる。柄は背部に強い段をもつ。万葉と刀子の先端を欠く。
17	36	I 区	2 面下包含層	鉄製品	釘	3.7	—	—	頭面形が方形の釘で、上部に木質が残る。
29	215	II 区	1 面下包含層	寶 箱	奈良造實	(外径) 2.45	(内径) 2.45	0.3	折縫年は1039年。

Tab. 5 桑原遺跡出土土石製品一覧表

(単位: cm)

地図 番号	遺物 番号	地 区	出 土 標 標	器 標	長(現存長)	幅(現存幅)	厚(現存厚)	材 色	色 調	特 性
16	9	I 区	谷	石 刀	—	—	—	砂 岩	灰 色	破片。上口の上面で受け皿部分である。
17	30	I 区	I 面 下 包 含 層	石 破	—	—	—	砾 石	黑 水 色	滑石製品。径5.6cm、底径6.3cm、高4cm。耳を4ヶ所もつ。 ミニチュア。
17	31	I 区	I 面 下 包 含 層	砾 石	9.2	2.9	1.9	砾 石	黑 水 色	異方形状で、6面を底面として利用。2次的に火を受けて褐色を呈する。
17	37	I 区	2 面 下 包 含 層	砾 石	17.7	8.9	5.0	砂 岩	灰 黑 色	複円形の砾石を2分割して利用。底径は3箇所で、砾が付着している。
19	62	II 区	SC 01	砾 石	9.3	8.3	5.15	砾 砂 岩	灰 绿 色	側面の一部を砾石として利用。全体に磨きが施される。
20	75	II 区	SC 04	石 刀	(5.4)	(7.2)	—	砾 砂 岩 片 岩	暗 绿 色	刃部片で、刃部は研ぎ出す。片刃状である。側面は研磨が粗い。
24	97	II 区	SP 65	石 刀	(8.4)	(5.4)	(2.9)	玄 武 岩	灰 青 色	未製品。刃部を欠く。砾石利用の剝片の両側から調整。
24	98	II 区	SP 26	凹み石	10.1	—	5.2	透 漆 石 漆 漆 角 石	铁 灰 色	A面・B面に凹みをもち、側面の一部を砾石として利用。
24	99	II 区	SP 19	砾 石	10.6	6.2	5.2	玄 武 岩	灰 青 色	断面形は横円形で、上小口を主として砾石として利用。右側面を凹させて利用。砾石が見られるので砾石の用途もある。
24	100	II 区	SP 34	砾 石	9.6	8.8	6.7	砂 岩	黄 黑 色	8面体の立方形で、上・下の小口と裏面を破損している。
28	188	III 区	SK 01	石 刀	11.2	5.0	2.2	玄 武 岩	暗 青 色	複雑な刃形で、両刃である。研磨は刃部側面にみられる。
28	189	III 区	SK 01	石 刀	10.6	5.4	1.8	玄 武 岩	暗 青 色	複雑な刃形で、両刃である。研磨は刃部側面にみられる。
28	190	III 区	SK 01	砾 石	(7.3)	(8.5)	5.3	砾 砂 岩 片 岩	暗 绿 色	砾打具として使用。砾石としても利用。
28	191	III 区	SK 01	砾 石	12.0	7.3	6.8	砂 岩	淡灰 赤 色	立方体に衝突し、A面及び1側面を落面として利用。
28	192	III 区	SK 01	砾 石	5.7	4.2	3.7	砂 岩	淡灰 赤 色	多面体に整形している。3面を利用。

桑原遺跡群

第1次発掘調査報告
福岡市埋蔵文化財調査報告書第432集

1995年（平成7年）3月31日

編集・発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1
電話（092）711-4666

印 刷 赤坂印刷株式会社

福岡市中央区大手門1丁目8-34
電話（092）751-7431